《研究ノート》

スコットランド西部と イングランド南部の入会地

――その近況に関する現地調査旅行の記録――

泉　留　維
三　俣　学
室　田　武

1. はじめに

本研究ノートは，2004年8月3日から同月10日の間，泉・三俣・室田の三人が行った英国入会地調査旅行に関し，その記録をまとめたものである。この三者のうち，泉と三俣は，英国（UK）だけでなく，同月10日以降，英国王室直轄属領（The British Crown Dependency）であるマン島（Isle of Man）およびアイルランドの西に位置する小島アキル島（Isle of Achill）での調査をさらに同月18日まで続けた。ただし，本研究ノートでは，この三者が同行できたスコットランド西部およびイングランド南部の入会地における見聞録を記録し，またそれぞれの調査地で得られた文献なども適宜紹介するものとする。

さて，なぜこの三者が英国の入会調査の共同調査を始めたかについて，その経緯をごく手短に述べておきたい。それは，三者ともに日本の入会地に関心があるばかりでなく，コモンズの名で知られるイングランドの入会地やイングランド以外の英国における類似の共同利用地に関しても最近関心を抱き始めており，現地でそれらの利用や管理実態を調査する必要を感

じていたからである。

室田・三俣に関しては，共著書『入会林野とコモンズ』（室田・三俣，2004）を刊行し，その中の一章でイングランドとウェールズのコモンズの歴史と現況にふれた。しかし，それは文献調査のみによる表面的な記述に終っており，現地調査を欠いていた。そして，この分野の研究をさらに進めるための現地調査の必要を痛感していた。そこで室田は，2004年5月中旬，ロンドンを訪ね，大ロンドン市の範囲内とその隣接地域に多数存在する入会地のうち3ヶ所を見学し，さらにスコットランド北東部のデー川（River Dee）沿いの町バンコリー（Banchory）の西部にあるバース教区（Parish of Berth）を訪ね，そこでの入会山（commonty）の活用に向けての新たな取り組みに関して，聞き取り調査および文献収集を行っていた。しかしながら，三俣に関しては，諸般の事情から予定が合わず，この調査に同行できなかった。調査を行った室田も，時間的制約のため，スコットランド・インヴァネス以北のハイランドに広がる同地方特有のクロフターと呼ばれる借地農の入会地に関する調査はできなかった。また，管理主体の異なるさまざまなロンドンの入会地に関し，それらの管理実態の相違を明らかにする余裕がなかったばかりでなく，大ロンドン市とその周辺以外の入会地に関して見学・調査を行う時間がなかった。

一方，泉は，17世紀に北大西洋を渡り，アメリカ合州国に移住した英国からの入植者たちの建設したニューイングランドにおけるコモンの歴史的展開過程に関する研究を三俣とともに始めていた。その最初の成果が，近刊の共著論文「ボストン・コモンの歴史的変遷と制度分析：ニューイングランドに移植されたコモンズの意義」（三俣・泉，2005）である。ニューイングランド最大の都市であるボストンには，300年以上にわたって，広大な入会地であるボストン・コモンが生き続けている（Fisher，2000）。しかし，その歴史的起源が英国にあるとすれば，泉としてもイングランドやスコットランドの入会地を現地で理解する必要を感じていたというわけであ

る。

本調査旅行は，そのような関心と背景を持つ三者にとり，必要不可欠なものとなり，三者は先ず，ロンドンのヒースロー空港に向かうべく日本を発った。目的地としては，スコットランドについては，クロフターの入会放牧の実態が分かるところ，イングランドについては，ロンドンとそこからさほど遠くない地域を訪ねることにした。前者に関し，Reid (2003) によると，そうした入会放牧がなされているのは，一言でいえばハイランドの各地であり，本土では主として北西部の大西洋西岸地帯，島嶼部ではオークニー諸島，シェットランド諸島，西部諸島（インナー・ヘブリデス諸島とアウター・ヘブリデス諸島）である。そこで，短期間の調査旅行としては，公共交通機関を利用するだけで接近が比較的容易と思われるインナー・ヘブリデス諸島のスカイ島（Isle of Skye）を訪ねることにした。後者については，ロンドンとその日帰り可能圏内の地域に関し，管理主体の異なる入会地を三人で手分けしてなるべく多数見学することにするが，具体的な場所についてはロンドン到着後に決めることとした。

以下では，この旅行における見聞やその後の文献調査の結果を，基本的には旅日記形式で記し，今後のより本格的な研究のための準備とする。8 月 3 日から 6 日までは，ロンドンからスカイ島への移動とスカイ島滞在について記し，7 日については，スカイ島からインヴァネスを経由してロンドンにもどる経過にふれ，8 日から 11 日にかけては，ロンドンとニューフォレストについて述べる。

2.　スカイ島のクロフター

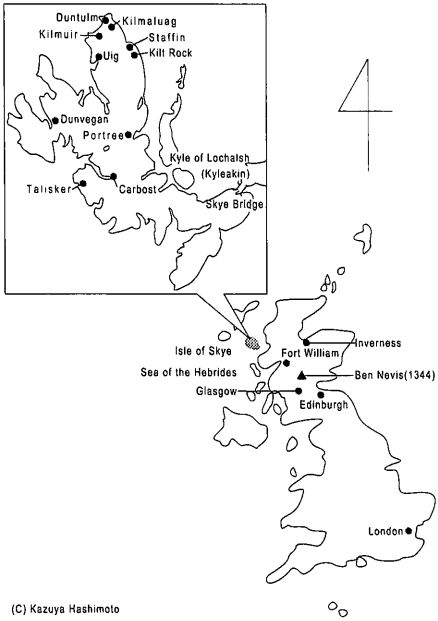
2.1　ポートリーまでの道のり

約 1 週間かけて英国のコモンの調査に向かう 8 月 3 日，それは出鼻をくじかれる形で始まった。室田は成田空港よりブリティッシュ・エアウェイ

ズ便にて，この日の午後，ロンドン・ヒースロー空港第1ターミナルに着いていた。一方，泉と三俣は，その便から30分後の飛行機で成田空港を出発したのだが，到着を目前にしてヒースロー空港上空で悪天候にみまわれ降りることができず，結果として2時間以上も遅延してしまった。そのため，3日中に飛行機を乗り継いでインヴァネスに入る予定がいきなり崩れてしまったのだ。ただ，とにもかくにもヒースロー空港で三人が合流することだけはできた。翌日，スカイ島に向かうためにまずスコットランドの主要都市に入らなければならなかったので，行動の起点を地下鉄のヒースロー・ターミナル駅とし，その近くのホテルに宿泊し，遅延等で疲れた体を休めた。

最初の目的地スカイ島に行くための新たな飛行機の予約を昨晩にしておくことができなかった。そのため電車で行くことに決め，電車で行くのならインヴァネスを経由するよりも，グラスゴーを経由したほうがよいと判断した。スカイ島行きのバスは，インヴァネスからは一日2便だが，グラスゴーからなら一日3便出ていることもそう判断した根拠の一つである。というわけで，まったく予定外のこととして，4日はグラスゴーへの列車旅となった。チューブ（地下鉄）のピカデリー（Piccadilly）線に乗り込み，King's Cross駅を目指し，12時発のインヴァネス行き特急に乗車した。グラスゴーまで一人86ポンドである。ピーターボロ（Peterborough），ドンカスター（Doncaster），そしてクラシックな雰囲気漂うヨーク（York）駅に停車した。その次がニューキャッスル・アポン・タイン（Newcastle-upon-Tyne）であったが，都市再開発の途上にあるらしく，駅周辺は非常に乱雑な感じであった。その次はバーウィック・アポン・トゥウィード（Berwick-upon-Tweed），そこを少し北上するともうスコットランドであり，程なくエディンバラに着いた。この日はインヴァネス行きが目的ではない一行は，エディンバラでグラスゴー行きに乗り換えた。電車は定刻16時45分にエディンバラを出発し，約1時間でグラスゴーに着いた。そして，駅から徒

地図1：スカイ島の位置と島内の詳細



歩10分の中央バスステーション（ブキャナン・バスステーション）にて，翌日のポートリー行きのバスチケットを購入し，ホテルへと向かった。

翌朝，前日に室田が予約しておいたタクシーを利用しホテルからバスターミナルまで向かった。この日8月5日は，グラスゴーからフォート・ウィリアム（Fort William）経由でクロフターの入会放牧地を訪ねるべくスカイ島へ向かう日である。スカイ島はインナー・ヘブリデス諸島の中で一番広い面積を有し，また約350マイルにおよぶ海岸線を有し，全長約50マイル，幅は約7～25マイルにおよぶ島である。その面積は，おおよそ約14万ヘクタールである。スカイ島の名は，バイキングの言葉にその起源を持ち，Skiは「雲」を，Eyは「島」を意味する。多くの場合，Skyeは霧のかかった島であるというように思われており，ここにその名前の語源がある（MacDonald, 1998）。

グラスゴーのバスターミナルを7時定時で出発した。Scottish Citylink社の黄色を基調とした車体のバスに乗り込む。一人片道22.5ポンドであった。グラスゴーを出て間もなく，バスはロモンド湖（Loch Lomond）の西岸を走り続ける。グレート・ブリテン島で最大の淡水湖であると運転手の説明を受ける。グラスゴーとグレンコー（Glencoe）の間の山岳地帯では，ハイキング用の小径のよく整備されている様子がバスの車窓からでもよくわかった。ときおり道路は鉄道と並行になる。後日の調べによると，これはスコットレイル会社（ScotRail）のグラスゴー＝マレイグ（Mallaig）線で，Route 6 a といい，エディンバラが始発（ないし終着）駅となっており，主要駅は Glasgow, Crianlarich, Oban, Fort William, Mallaig である。エディンバラ＝マレイグ間を一日3往復している（Website：ScotRail Time Table 2004）。運行本数は少ないとしても，グラスゴーからマレイグまでが鉄道でつながっているということは，マレイグが何らかの意味で重要な地だからであろう。地図で見てわかる限りではマレイグは港町で，そこからスカイ島の南端に近いアーマデイル（Armadale）港へのフェリーが出ていることくらいである。

グレンコーの村に下る途中に Pass of Glencoe という峠があるが，そこから渓谷が始まるが，そこを通過する際，運転手氏は，ここが「グレンコーの虐殺」（Glencoe Massacre）のあったところだと解説してくれた。観光バスではなく，普通の定期路線バスなのだが，この運転手さんはあたりの地形や歴史に詳しく，それを乗客に伝えてあげたいというサービス精神にあふれている。

旅行中は，「グレンコーの虐殺」といわれてもいつごろのどういう事件のことなのか分からなかった。しかし，どうやらハイランドの歴史にいきなり直面させられたという感じがした。そこで後日調べてみると，それは英国史に必ず登場する名誉革命（1688-89年）が，スコットランドのハイランドでは必ずしも歓迎されなかったことに関連して起こった1692年の事件で

ある。

そこで先ず名誉革命であるが，それは，当時の同君連合という政治体制の下で，ローマ・カトリックよりのスコットランド国王ジェームズ7世(イングランド国王としてはジェームズ2世）が，イングランドのプロテスタント勢力の圧力で退位を余儀なくされた事件である。その勢力は，ジェームズ7世の娘メアリの結婚相手であり，カルヴァン主義を信奉するオランダの王子オレンジ公ウィリアムを王位に就けようと画策した。ウィリアムはこれに応じ，軍を率いて海からイングランドを目指し，1688年11月5日，デボンシャーに上陸し，王位を目指した。形勢不利を悟ったジェームズ7世は，わが身の安全第一とし，フランスに逃亡した。この結果ウィリアムは，イングランドのウィリアム3世を兼ねるスコットランドの国王ウィリアム2世として即位し，メアリも女王となったのである。

この政変（クーデター）は，イングランドにおいては無血のうちになされたので，イングランド人はこれを The Glorious Revolution，ないし The Bloodless Revolution と呼んでおり，日本ではそれを名誉革命と訳している。これによって誕生した王朝をハノーヴァー朝という。だが，スコットランドにおいては自国の国王が王権から追放されたのであるから，この政変は「名誉」どころではなく，それを快く思わない人々が少なからずいて当然であった。ウィリアムがイングランド王となる過程は無血であったが，彼がスコットランドおよびアイルランドの王も兼ねるようになる過程では，ウィリアム派とジェームズ派の間に流血の争いがあった。

しかし，ジェームズ派の反抗は短期間のうちに鎮圧され，スコットランドには，国家教会としての長老教会体制が樹立された。ただし，ハイランドにおいては，この新体制が安定するかどうか，状況は流動的であった。このため，「氏族長の忠誠を強要するために，1692年1月1日までに国王ウィリアム二世に対する忠誠宣誓の署名が，すべての氏族長に求められた」(キレーン，2002，142頁)。「宣誓をし損なったり，拒否した人物への処罰

は残忍を極めたものであった。(中略) 氏族長とその一族は法の保護を失い，任意に殺害されるかもしれなかった。大半の氏族長が，指定された期日までに署名を終えた」(同上，143 頁)。

ところが，一人だけ期日までに署名をしていなかった人物がいた。マクドナルド家の分家に当たる老氏族長グレンコーのマキーアンである。「彼は先ず，宣誓する場所とは異なる所に赴いており，ベン・ネヴィス（後述する山の名前）の真南にあるグレンコーからファイン湖のへさき近くにあるインヴァレアリまで，40 マイルの距離を厳冬の最中に移動しなければならなかった。マキーアンは，ようやくたどり着いて宣誓を果たしたのだが，そのような遅刻は，ハイランドでの乱暴な処置を望むエディンバラの人々に対して，つけこむ口実を提供するようなものだった」(同上，143 頁)。そして次のような事件が起こった。

「元凶となったのは，スコットランド国務大臣ステア伯ジョン・ダルリンプルであった。彼は一計を案じて，計画に対する国王の署名を手に入れた」(同上，143-144 頁)。「グレンコーのマクドナルド家は，ローマ・カトリック教徒であると信じられていた。彼らはまた野蛮で，無法者の高地民であると思われていた。1692 年 2 月 1 日，税金未納という名目で，複数の軍隊が［グレンコー渓谷］に宿営した。彼らは，正式な国軍ではなく，アーガイル伯配下の連隊であった。アーガイル伯の称号を持つキャンブル家は，数世紀にわたってマクドナルド家代々の宿敵であった。指揮を執ったのは，グレンライアンのロバート・キャンブル大尉であった。彼は，2 月 5 日の夜にマキーアンとともに夕食をとった。翌朝，夜明けとともにキャンブルの一団は，一片の疑いも抱いていなかったマクドナルド一族に襲いかかり，彼ら 38 名を惨殺した」(同上，144 頁)。

死者はそればかりではなかった。惨殺は 3 ヶ所で行われたが，それらの現場を辛うじて逃れた老人，女性，子供が多数いた。彼らとしてできたのは，就寝中に身につけていたものだけの姿で，歩いて周辺の山の中へ逃げ

込むことだけであった。しかし，そこは深い雪の積もった極寒の空間であり，近くに駆け込んで救助を求めることのできる家があるわけでもなく，彼らは疲労と寒さと恐怖のために次々と倒れ，死の旅路についた(Website：Massacre of Glencoe)。

「グレンコーの事件は，政府の後援を受けた大虐殺であった。使われた軍隊がキャンブル家のものであったとしても，彼らはしかるべき軍指揮官に率いられた正規軍であり，国家政策を遂行したのだった。グレンコーの虐殺をここまで悪名高くしたのは，この政府の関与のためであった」(キレーン，2002，145頁)。

私たちの乗ったバスが通過したグレンコー渓谷は，まさにその「グレンコーの虐殺」の現場だったわけで，旅のあとでふりかえってみると，ガイド好きの運転手氏は，乗客にそのことを伝えたかったのである。

フォート・ウィリアムに到着したのは，出発して約3時間後の午前10時過ぎであった。このフォート・ウィリアムでは運転手の交代があった。その間の休憩時間が15分程あったので，近くのスーパーへ駆け込んで，昼食用の買い物をすることができた。このフォート・ウィリアムのバス停の隣には鉄道の駅があり，そのプラットホームには数両の客車に連結した蒸気機関車（SL）が停車中で，蒸気を吹き上げていた。これは，上記の鉄道路線のうち，フォート・ウィリアム＝マレイグ間に限って，冬季を除いて一日一往復するSLであるらしい。先ほどの運転手氏は，よほどガイド好きと見え，「ほら，あそこにSLが停まっているだろ。あれが見られるなんて君たちラッキーだよ」などと私たちに話しかけてくる。

後日に調べてみたところでは，「ザ・ジャコバイト」号といい，West Coast Railway Companyが経営している。確認していないが，線路をスコットレイル社から借りて観光客向けにSLを運行しているのではないだろうか。6月7日から10月8日までの月曜日から土曜日まで毎日運転している。ただし，日曜日の運行は7月25日から8月29日までに限定されている。その

SLの発着時刻については，フォート・ウィリアム発10時20分，グレンフィンナン（Glenfinnan）11時25分発，アリセーグ（Arisaig）12時5分発，そしてマレイグに12時25分に着く。マレイグ14時10分発，アリセーグ14時36分発，グレンフィンナン15時21分発，そしてフォート・ウィリアム着16時00分である（Website：ScotRail Time Table 2004）。

私たちがフォート・ウィリアムに着いたのは，先述のように10時であるから，今から考えてみれば，私たちが見たSLは，そこを10時20分に発車してマレイグに向かう予定のものだったに違いない。なぜそれに「ジャコバイト」という名前がついているのかについては，後に述べる。

フォート・ウィリアムはベン・ネーヴィス（Ben Nevis）という山の登山口ともなっている町である。ベン・ネーヴィスは標高1,344メートルで，グレート・ブリテン島の最高峰である。バス停からは，確かに高い山々が見えるが，どれが本当のピークかはわからずじまいであった。このベン・ネーヴィスは，最近までDuncan Fairfax-Lucyという人物の私有地であったが，持ち主が売りに出し，2000年6月にJohn Muir Trust Properties（JMT）という環境保護関係のトラストに買い取られている（Website；Ben Nevis）。

スカイ島に向けて再びバスは発車するが，新しい運転手氏は何の説明もしない。しばらくすると，左手の水面側に古い城跡が見えてきた。古城が水面に突き出すような形で建っている。観光名所Dornieである。そこに向かって歩いていく人，あるいはそこから自動車道路の方へもどってくる人がかなりいるからである。その城は，絵葉書などによく出てくるEileen Donan Castleらしい。しかし，ここでも運転手の説明はない。

カイル・オブ・ロッハルシュ（Kyle of Lochalsh）にてスカイ・ブリッジ（Skye Bridge）という橋を渡り，スカイ島へ入った。それは12時30分のことであったから，グラスゴーを出発して5時間半でスカイ島入りしたことになる。橋を渡ってすぐの集落がカイレイキン（Kyleakin）で，そこ

からポートリーまで43キロである。このスカイ・ブリッジは，車ならわずか数分足らずで渡りきってしまう短い橋であるが，陸路でスカイ島に入る場合は必ず通らなければならない橋である。1995年10月に完成したのであるが，この公共性が高いと思われる橋にもかかわらず，その通行料金は半端な額ではない。乗用車で片道5.7ポンドもするのである。スカイ島の自然を保護するため，自動車の乗り入れに対する入島税でもとっているのかと思ってしまったが，この高額な通行料金は地元でも大きな問題となっているようで（Website：BBCスカイ・ブリッジ），住民の多くはその減額や撤廃を求めているが，建設費の回収や元来の移動手段であったフェリー会社との関係でまだ解決には至っていない。

ポートリーには，ほぼ定刻の午後1時40分に着いた。昨晩，室田がグラスゴーから宿泊予約をしておいたベンリー（Benlee）という名のB＆Bに行き，13時50分にはチェックインを済ませた。その後，すぐにインフォメーション・センターでパンフレット類を収集した。次に町役場訪問し，クロフターの入会放牧の現場を見られるような島内ガイドを雇うにはどうしたらよいかを訪ねた。それならRed Deer Travelという旅行社に頼むのがよいが，電話番号は分からないとのことで，再びインフォメーション・センターへもどり，その旅行社の電話番号を教えてもらって電話をしてみるが誰も出ない。

2.2　スカイ島のフットパスを歩く

インフォメーション・センターでは，数多くのおみやげ物や本を売っているのは各国共通であろうが，このスカイ島のポートリーのセンターでは，フットパスなる遊歩道のガイドブックが一つの棚を占有していた。辞典のようなものから，携帯できる薄っぺらいものまで多種多彩であるが，その中でも一番薄くスカイ島のみのものを一冊購入してみることにした。

そもそもイギリスでは，日本にはない「歩く権利」という公的な権利が

存在する。絶滅の恐れのある生物の保護など何か特別な理由がない限り，仮にそこが私有地であっても，万人が自然の中を歩く権利が保証されているのである。この権利は，イングランドやウェールズでは19世紀半ば頃から議論が始まり，1932年に「歩く権利法」が制定され，さらに1990年，2000年に改正されている。この「歩く権利」を日本において精力的に紹介してきた環境法学者の平松（2003）は，この歩く権利法の意義を「国民的レクレーションの場としてクルマなきフットパスを提供・整備するよう土地所有権者・農民に課すること」（169頁）にあると述べている。

このようにその土地が誰の所有であるかに関係なく歩くことのできる人専用の遊歩道「パブリック・フットパス」は，イングランドおよびウェールズ全体で地球四周にもなる169,000キロにおよび，自動車や馬の侵入は法的に許されない。私たちが訪れたスコットランドでは，イングランドやウェールズにはかなり後れを取ったが「2003年土地改革（スコットランド）法」が制定されたことにより，それまで法的根拠が不明確であった「歩く権利」が，一定の条件の下で私有地を含むさまざまな土地を歩くことのできる権利として認められるようになった。

スカイ島にも，当然ながら多くのフットパスが存在し，それに関するガイドブックの種類もたいへん豊富である。先述のインフォメーション・センターで購入したポケットサイズのガイドブック（2.5ポンド）にでさえ，1.6キロから19キロまでの日帰り可能な30ルートが難易度別に紹介されていた。このようなガイドブック作成には，スコットランドにおいて「歩く権利」の獲得ならびにその保護運動に長年尽力してきたスコットランド歩く権利協会（The Scottish Rights of Way and Access Society）が一役買っている。この協会が，フットパスの道標を設置したり，ルートマップ作りを地方政府の代わりに行っている。

泉の提案で，ガイドブックに載っているルート中でもっともポートリーから近く小一時間のフットパスに行ってみることにした。インフォメーシ

ョン・センターを起点にして，距離約3キロ，高低差約100メートルのフットパスである。パブリック・フットパスは，まずポートリー湾沿いに数百メートル続き，路肩に“Lochan an Stoirr Storr Lochs 6.5m”と書かれた「スコットランド歩く権利協会」の道標がある。それを先に進むと入り口の木製ゲートにぶち当たった。フットパスの入り口であり，そのゲートには“Urras Clann Mhicneacail Nicolson Trust：NO CAMPING，NO CYCLING，NO DOG FOULING”という看板があがっている。しばらくいくと，丘のほうから二人の男が降りてきて，私たちに「ブッシュがあるが，眺めがよいから上にいくとよい」という。私たちはその勧めを受けて丘を登ることにする。途中，ポートリーに住んでいたと思われる氏族(CLAN MACXWACAIL）で，このフットパスの提供者であり，かつ北アメリカ，オーストラリア，ニュージーランドに出て行ったと思われる移民の碑が堂々とおかれていた。その碑には，記述が消えかけていて十分には読めないが，このあたり一帯の土地は，広く公共に資するために，1960年代くらいに購入されたものというような記述が見えた。

写真1：スカイ島のフットパス(撮影：泉留維)

スカイ島からの移民に関して言えば，後述するようにハイランド一帯のクロフターと呼ばれる借地農を地主の都合で追いはらった歴史的大事件，ハイランド清掃以降に激増していく。特にスカイ島からの移民のピークは，次の記述にあるよう19世紀中葉に迎えた。

カロライナ（Carolina：1663年に建設。後に南北カロライナ州に分離。北米東海岸の英国植民地）は，スカイ島の人たちをひきつけた初めての場所であった。1771年9月，370名がスカイ島から北カロライナに向けて出帆した。その後，数百を越える人たちがそのあとを追い，1790年までには最大で2,000名をかぞえる人たちが海を越えて新世界に向かったと見積もられている。1837年には，北スカイから459人の男女の一団がオーストラリアに出帆し，3年後には600名がポートリー地区より同国に向けて旅立っている。1840年から1883年の間には，少なくとも7,000人の人たちがスカイ島から移民し，そのうちのほとんどが強制的にしかたなく移住させられたと言われている。非常に多くの人たちが，古くそして航行に不適な船に詰め込まれたゆえ，その多くは目的地に到達できるはずもなかった。目的地に到着しても，直ぐに栄養失調や病気が，生き延びようとする人たちに信じられないほどの苦難をもたらし，そして生きるために，粗末な木造の小屋に住まい，奴隷のように働かざるを得なかった。土地をならし，条件の厳しいところから生活を切り開いていくには多年を費やすことになった。島にとどまった人たちにとっては，賦課（負担）や規制の期間になると，彼らの生活はほぼ不可能になるほどであった。クロフターの地代の納入の遅れに対する地主の共通の対処方法は，借地条件の違約による解除を申し付けるというやり方であった。海岸における海藻の採取は禁じられ，クロフターは犬を飼うことも許されなかった（MacDonald，1998，pp.6-7）。

さて話を戻すと，私たちの見たその移民の碑から丘の頂上をさらに目指

して行くことにした。道の右手全体が大規模な断崖で，眼下には青い入り江 Sound of Raasay が広がっている。その湾内に養殖用の丸い囲いが多数見える。大きな魚がはねているのが遠方からでもよく見える。それらの大きさから考えてサケ (Atlantic Salmon) のようだ。確かに眺望のすばらしい丘だったが，小さな羽虫が多く，しつこく顔や手にまとわりついてくるのにはやや閉口した。フットパスの道自体は，もちろん舗装などはされていないが，階段を設置するなど整備は比較的行われていた。ただ，フットパスの周りが，ブラッケン（シダ類）が繁茂していたのには驚き，後日，これがスカイ島の大きな問題の一つになっていることを知る。

ポートリーの町にもどり，港寄りのホテルの小さなレストランでの夕食中に赤いワゴン車が外を通る。それに Red Deer Travel の名があるのに泉が気づく。室田が追っていって，それを運転していた男性に，翌日ガイドをお願いできないかと聞いてみたのは午後 8 時頃であった。行く場所や所要時間により 60 から 90 ポンドくらいということで妥当だと判断し，その場で翌日のガイドを予約した。明朝 9 時に私たちの宿泊するベンリーに来てくれることになった。

夜，私たちは街の雰囲気を知ろうと外出した。Public Bar というパブに立ち寄ったとき，ある若者が英語でない言葉で話しかけてきた。会話にもならなかったその言葉は，おそらくゲール語（ケルト語の一種）であった。現在のスカイ島の人口の半分近くの人は，ゲール語を話すことができる。この島でうまれた生粋の島人は，ケルトの遺産に大変誇りを持っており，この特有な言葉で貴重となった言葉をつなぎ続けていきたいという厚い希望があることを帰国後に私たちは知った（MacDonald, 1998)。

2.3　スカイ島内を見て回る

6 日，朝食は先ず，ポリッジがサーブされた[1]。日本人にはオートミールというほうがわかりやすいであろう。次にかなり豪華な動物性食品の多いプ

写真 2 ：スカイ島のブラッケン（撮影：泉留維）

レートがサーブされた。

Red Deer Travel 社の真っ赤なワゴン車が，約束どおり朝 9 時に迎えに来てくれる。運転しているのは，昨夜と同じ男性で，マーチン（Martin D. Briggs）という人であった。旅行社といっても，一人でやっている観光案内業であることが道中の会話から分かった。昨日数回電話をしてもつながらなかったのは，電話を受ける事務員などがいないためである。台湾の観光ガイドブックにも「紅鹿旅遊」として記載あり，Lonely Planet Publishing のガイドブックにも紹介があった。つまり，スカイ島観光に関しては最も信頼できるガイドとして，世界的に知られている人物であることがこれで分かった。

そのマーチンさんであるが，70 歳を過ぎていると思われる老人である。しかし長身で，しかもきわめて体格がよい。疲れているようにも見えるが運転の腕は確かであり，かつて定期バスの運転手をしていたというのがうなずける。定年退職後に，自営のガイド業を始めたものらしい。

森に関しては，カラマツ中心の四角形の植林地がパッチ上にあちこちに

見え，奇妙な感じのする景観を呈している。近くで見ると樹齢はさまざまであり，Heather が至るところに赤紫色の小さな花を咲かせている。

マーチンさんがいうには，スコットランドはとてもいいところだが，二つだけよくないものがあるという。一つは先述のブラッケン (bracken) であり，もう一つはミジ (midge) だという。昨日，断崖の上の丘を散策中に私たちにしつこくまとわりついてきたのが，彼のいうミジに違いない。

スカイ島の至るところにブラッケン（シダ類）が繁茂している。それがよくないもの，悪いものという場合，どういう意味でそうなのかは聞き忘れた。このブラッケンは，燃料としては役立つ。その採取が入会権の対象となっていた地域がイングランドにはあり，例えば後述するニューフォレストがそうである。日本の最近の関西地方におけるタケの繁茂のように，他の植生を押しのけてまで繁茂するからよくないのだろうか。実は前日の散歩の道中で，試しに乾燥したブラッケンに火をつけてみたが，竹のように勢いはないがチリチリと燃えたのであった。十分に乾燥させ，それなりの量があれば家庭用燃料となりそうだ。日本ではシダはかなり一般的な植物であるが，多いのは山の中の日陰である。これに対し，スカイ島では日当たりのよいところにもたくさん生えている。

ポートリーの市街から車で北に向かって 10 分強走り，マーチンさんは停車して，クロフターの入会放牧 (crofter's common grazings) の現場の一つはこのあたりだと紹介した。道路側の斜面一帯が入会地で，羊毛を刈る設備などのあるところはむしろ丘の中腹のやや高いところにある。マーチンさんは，crofters と farmers とを明確に使い分けていろいろ説明してくれる。彼にとっては，スカイ島の誰と誰が crofters で，誰が farmers であるか，ほとんど全部知っている感じである。その際の farmers が日本でいう自作農に近い概念のように思える。

彼はまた，道路際の丘の中腹になにやら円筒形の建造物の半ば崩れかけたものが見えるところでも停車した。それはブロッホ (bloch) の遺跡であ

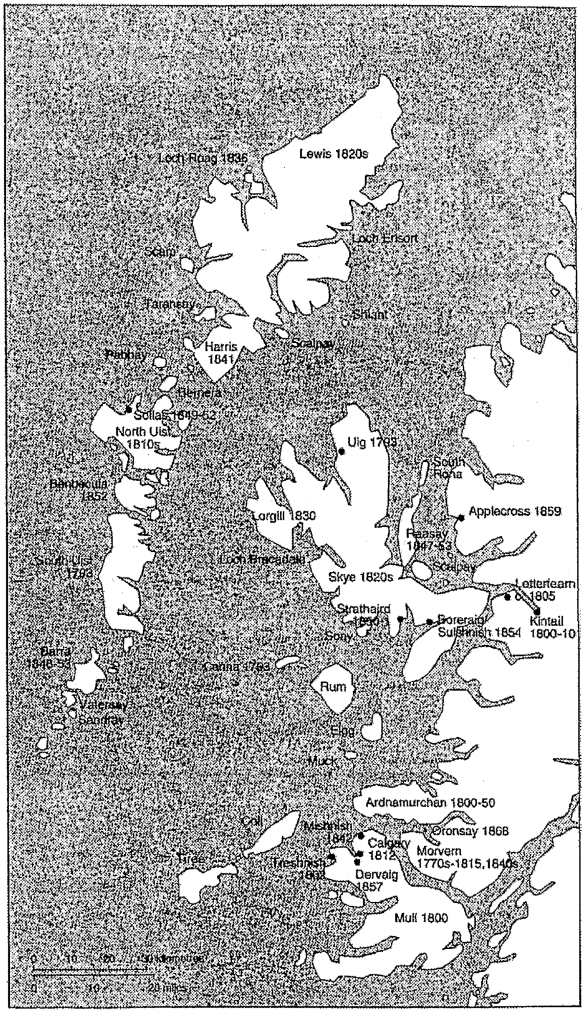
写真 3 ：ブラーエスの戦いの記念碑（撮影：泉留維）

った。その位置は，海から少し離れてはいたが，マーチンさんは，あそこからは海がよく見えるという。ブロッホについては，たとえば次の解説がある。

ブリテン島北部では，鉄器時代の定住期以来残存している人工遺跡は決して多くない。しかし，スコットランド以外では発見されていない有名な円塔〔ブロッホ〕がある。これは，通常，海岸沿いに建設された大規模な空積みの塔である。(中略)この建築物は，防衛を基本的な目的に造られたもののように思われる（キレーン，2002，21 頁)。

室田は，保存状態のよいブロッホは，オークニー諸島，シェットランド諸島に多いと事前に聞いていた。しかし，考古学に興味があるわけではないので，詳しく事前に文献を読んだりしたわけではなく，スカイ島で目の前にしている遺跡がその一つであるとは，その場では気づかず，旅行後にそのことを知って驚いた。ブロッホは，純粋なケルト文化の産物であり，

地図 2 ：スコットランド西部の諸島における清掃のその位置と年代



（出典）Richards(2000), pp. 333 より転載

今日のスコットランドでは，それらの一つ一つに名前がつけられ，重要な歴史遺跡として保存の対象になっている。私たちが，道路から遠望したのは，ダン・ビーグ（Dun Beag）という名のブロッホであり，紀元100年頃建造されたものであることが分かっているという。

マーチンさんは，道路わきにそれほど大きなものではないが，何か重要らしい石碑の立っているところでも停車した。碑文からすると，それは1882年のブラーエスの戦い（Battle of Braes）の記念碑である。

クロフターと地主の間における何かの争いに関する記念碑らしいが，その場では詳しいことは分からなかった。後日調べてみると，後で述べる「ハイランド清掃」の嵐が吹き荒れた後，19世紀後半のハイランドでは小作農の権利意識が高くなった。ポートリーの近くにあるブラーエスという村の場合，そこに住むクロフターたちは，ベン・リー山（Ben Lee）を放牧地として代々利用してきた。ブラーエスはマクドナルド卿という大地主のエステートであったが，ある時期にマクドナルド卿は自分の所有する羊の飼育のために，ベン・リー山で彼らが放牧することを禁止した。これに対し，先述したように権利意識を高めたそのエステートのクロフターたちは，以前の放牧権を主張し，もしその要求が聞き入れられないならば地代を支払わない，と宣言した。そして実際，クロフターの何人かが地代の支払い拒否したのである。

だが，マクドナルド卿からすれば地代の徴収は法にかなった行為であった。そこで，不法行為を行っているのはクロフター側であるとして，警察の介入を要請した。それに応えて若干名の警察官がインヴァネスからブラーエスにやってきたのであるが，クロフターたちは彼らを追い払ってしまった。このため，インヴァネスの警察署は，グラスゴーからの警官隊派遣を要請した。この結果，50人の警察官がスカイ島にやってきたのである。それほど多数の警察官など見たことのないブラーエスの人々は，最初は混乱しなすすべを知らなかったという。しかし間もなく，女性や子供を含む

約100人が団結し，棒切れを振るい，投石をするなどして抵抗した。逮捕者も出た。

この事件が1882年のブラーエスの戦いとよばれるものであり，今から考えれば，クロフター家族と警官隊の衝突の現場近くに後日建立された記念碑をマーチンさんは私たちに紹介したのである。そしてこの戦いが，地主の横暴をスコットランドだけでなく英国全体に知らしめる結果となった。インヴァネスの裁判所における逮捕者の裁判には多くのジャーナリストが取材に駆けつけ，大きなニュースになった。もちろんこの事件一つだけが原因ではないが，3.5に述べるようなその後のクロフターの入会放牧が制度として確立するに当たり，この事件が一つの役割を果たしたことはほぼ間違いない（Website：Short History of Crofting in Skye)。

2.4　Skye Museum of Island Life を目指して

一行は前述したクロフターの住居をそのまま利用したKilmuirにあるSkye Museum of Island Lifeを尋ねるべく車を進めた。途中，マーチンさんは，スカイ島観光の名所のひとつであるCarbostからさらに西にあるタリスカー（Talisker）ウィスキー蒸留所にワゴン車を停めた。半時間ほどのツアーが準備されており，若い男性ガイドが，要領よく蒸留所内を案内してくれた。

この蒸留所見学がすむと，マーチンさんはワゴン車をかなりの速度で操り，北方へ向かい，ダンヴェガン城(Dunvegan Castle)の入口近くで停車した。そこにあるレストランで昼食をとるとよいという薦めであった。ここは一大観光地らしい。スカイ島は，かつては幾つかのクラン（氏族）によって統治されていた。ゲール語ではClannと書き，クランの各メンバー(clansmen)は，土地を上流階級のものとするクランの長と密接な関係を必要とするようになっていった。クランの人たち（clansmen）は自分たちの長のために働きまた外敵と戦う。その見返りとして，彼は自分に忠誠・奉

公をする者に対して，彼らが望めば，長の名（異名）を与えた。また彼らは，「ランリグ」という土地制度で知られる土地で働いた。インフィールドとアウトフィールドを合わせて耕地（arable land）というが，クランの人たちの耕地利用は，このランリグ(runrig)という制度下にあった。一軒の農家は，数多くのそして耕地内のあちこちに散在する細長い短冊状の土地を耕作したわけであるが，そうした短冊形の土地の一片一片をリグという。ランリグ制とは，「一定の地域内の耕地が小さな区画に分割され，ある耕作者に割り当てられたいくつかの区画は一年限りで利用でき，次の年には別の区画を耕作する制度であり，ある年に地味のよい土地が利用できても，次の年には悪い土地に移ることになるかもしれない。耕作に従事するすべての人がこの規則の下に行動するので，誰かがいつも恵まれた土地を利用し，別の誰かは毎年悪い土地を利用しなければならないということがありえない制度であり，不平等の入り込む余地のない制度である」(Reid, 2003)。

そのようなクランマンの長の一人として，北西部のマクラウド(MacLeod)家が700年以上にも渡って住居としていたのがダンヴェガン城であり，家宝や勝利をもたらした旗などが展示されているとのことである。しかし，時間を考えて入場せず昼食のみとし，先を急いだ。

2.5　クロフターの入会放牧と制度化の過程

これまでの記述でも既に何度か登場済みであるが，クロフターの入会放牧がそもそもどういう過程で一つの権利として社会的に認知されるようになったのかをここで手短に触れておく。

先に見たようにハイランドでは，厳格な平等主義を貫くランリグ制が広がっていたが，このようなやり方は，平等に徹しすぎて土地改良がなされず，経済合理性を欠くとされ，大地主は何とかしてそれをやめさせたかった。地主は，短冊状の土地片をまとめて生産性をあげることによって，高

まる羊毛需要に応え利益を上げたかったわけである。しかし，ハイランドから農民をすべて追い払えば，それはそこに労働力が無くなることを意味する。特にアウター・ヘブリデス諸島の場合，地主は，昆布などの海藻を工業原料として販売することで利益を得ていたため，海藻採取の労働力がなくなるのは地主にとっても不利益であった（Reid, 2003）。地主は土地片をまとめる一方で，耕地の狭い借地農が生活できるようにもしなくてならない。そこで次第に制度化されていったのがクロフターの入会放牧制である。丘陵地や島の高台については分割を行わず，農家が牛などをそこに入会放牧することを認めたのである（crofter's common grazings）。入会地の利用という面で古来の慣習を認める一方で，近代の事情に合わせて共同耕作はやめるという方法を取ったのである。

このように高台における入会の存続を認められることで成り立っていた借地農たちの暮らしを襲ったのがハイランド清掃であった。サザーランドの内陸部は羊の飼育に最も適し，一方で人間の居住には適さないという話を鵜呑みにしたハイランド清掃の直接的な責任者であるレヴソン・ガワー（George Granville Levson-Gower, 1758-1833）は，数千世帯のクロフターの家族を北西部から追い立て，彼らの住居を焼き払い，大規模な羊飼育農場を開設したのである。更に地主たちは，狩猟に適したシカの住む森にするほうがより儲かると悟ると，牧草地を森林に変えてしまうという暴挙に出た。清掃によって海外へ移住させられたり，惨殺されたりすることをかろうじて免れたクロフターたちは，とうとう 1882 年にクロフターの戦争（the Crofter's War）と呼ばれる大規模な社会運動を起こすにいたったのである。

このような大規模な運動を通じてクロフターたちは，1885 年に初めて選挙権を得た。それを皮切りにして猛烈な抗議活動を展開し，ローランドの人々からも支援を得た。これにより，小作料を妥当なレベルに抑えることを求める法律「1886 年クロフター保有権法」（Crofters Holdings (Scotland)

写真 4 ：ダンタルム近郊のクロフターの住居跡（撮影：泉留維）

Act of 1886）が制定されるにいたったのである（Reid, 2003）。この 1886 年法により，クロフターは，耕地と放牧用丘陵地の両方を利用でき，そして後者については入会放牧の形の利用であることが法的に確認された。その後，この法律は改正などを通じて，よりクロフターの権利が保障される形となって現在に至っている（三俣・室田，2005）。

2.6　ハイランド清掃の爪跡

途中，「ハイランド清掃」（Highland Clearances）の跡地（海岸沿い）を崖の上から見下ろせる場所でマーチンさんに車を止めてもらって写真を撮った。草の生い茂る平地のあちこちに半壊状態の石垣があり，そこに人家のあったことをしのばせる。クロフターたちが，ハイランド清掃がすすむにつれ，どんどん海岸線へと追いやられていった歴史の一端をうかがうことができる。そのような典型的な場所として MacDonald (1998) は，ダンタルム（Duntulm）に向かう道のスコア湾（Score Bay）の北 0.5 キロにわたる集落跡を上げている。

ではそのようにクロフターが海岸線に追い込まれていったのはどのようなことに端を発していたのであろう。それには後述するジャコバイトの乱以降の歴史的展開を知る必要がでてくる。MacDonald（1998, pp. 5-6）にはその詳細が次のように記されている。

18世紀ごろハイランドは，長らく続いてきたクランマンの生活を破壊することになった騒乱に巻き込まれていく。チャールズ・エドワード・スチュアート王（1720—1788）がハイランドの地に立ち上がり，多くのクランの長は自分たちのクランマンとともにハイランドを後にし，チャールズがスチュアート朝の王位に返り咲く支援をした。この最後のそして不幸をもたらしたジャコバイトの乱は失敗し，最終的に1746年のクローデンの戦いでハイランドのクランは完全に敗れ去った。ハノーバー・キング・ジョージ下のイングアンド人は，ジャコバイト派のために戦ったクランの長とクランマン全てをいやしめるように絶えず心がけた。「非武装法（Disarming Act）」が発効されるに及んで，悲惨な状況の暗闇はハイランドや島々全体に広がっていった。ハイランドの伝統的な着物の着用は禁じられ，楽器の使用も禁止され，ゲール語の使用までもがはばかれるようになった。しかしクラン制が破壊され，中央政府が支配を進めるにつれて，すべてにわたってもっとも大きな変化が起こった。クランの長とクランマンとの間に長期にわたって成立してきた関係は，完全に変質した。領主によって小作人（tenantry）やクロフターにかけられる圧力が増加するにともない社会情勢は悪化しはじめた。その領主は，自分たちの所有するものに対して国王に支払うためのより多くのお金を必要とするようになっていたのである。

小自作農地やクロフトの地代は高騰し，その結果としてクロフターたちはたちまち借金を抱えるようなった。土地所有者は　ボーダーミル（Border Mills）に羊毛を供給する生業をもつ南部の羊毛産業者に対する土地の賃貸に切り替えた。チェビオット（Cheviot）の羊[2)]とその羊飼いたちは，大勢で

ハイランドに到達し始めた。彼らは，賃借人(tenant)やクロフターを追い払うことになり，自分たちの土地から離れることを拒むものたちは，力づくで，立ち退かせることになった。彼らは土地保有(tenure)に関する保証は何も持っていなかった。悪名高いハイランド清掃が始まったのである。自分たちの生まれた地にとどまることを強く欲した人たちは，彼らが漁業によって何とか生き延びようと試みた海岸沿いの小さな土地に強引に追いやられた。

ここまで悲運を辿ったクロフターに関する資料，文献を組解いてきたが，赤いワゴン車の私たちの一行は，さらにフィールド・トリップを続けた。アウター・ヘブリデス諸島のいくつかの港へのフェリーが出ている要所 Uig の町を幾度も往ったり来たりしながら，さらに北上し続け 16 時 30 分頃，Kirmuir にある Skye Museum of Island Life に到着した。このミュージアムは，クロフターの住居をそのまま用いたような全部で六棟の草葺屋根の建物からなる。マーチンさんにその屋根材の草は何かを質問すると，小麦藁のはずだという。ただし，それが正しいかどうかはわからない。なぜなら，Skye Museum(刊行年不明)内の案内板には，屋根材は common rush ないしは地元産のアシ（locally-grown reeds）だと書いてあるからである。Common rush とは，イグサ（トウシンソウ）であり，筵・籠などを作る材料として知られる。ありていな博物館とは違い，六棟内にはクロフターの生活の様子がそっくりそのまま再現されていた。使用していた日常生活品，ごくごくプライベートの写真などが展示されていた。素朴なミュージアムであるが，ハイランド清掃が，クロフターに与えた影響のすさまじさを知るに十分な展示の数々だった。その後，ミュージアムから程なくはなれたところにある Flora MacDonald らの墓地を訪ねた。この地にゆかりの深い彼女のことについての詳細は，後に別記する。

私たちがマーチンさんに案内してもらおうと期待していたクロフターに

関する主だった場所はほぼ全てこの時点で訪れたことになる。この時点でもう時計は17時半すぎを指していた。このあと，私たちは，宿泊地であるポートリーのB＆Bベンリーまでまっすぐに帰るものと思ったのは大間違いであった。私たちは70歳過ぎの齢と思われるマーチンさんの猛烈なパワーに圧倒されることになる。ポートリーまでの帰路でマーチンさんお勧めのスカイ島の名所に私たちはつぎつぎと案内されたのであった。まず，Bornesketaigにつづき，かなりの標高をずんずん車で上ってゆき，起伏に富んだ壮大な地形をもつKilmaluagへ。そこですこしばかり山面を登り歩きながら，湿地(bog)の感触を知る。それに続き，Flodigarry County House Hotelに案内される。空腹ならば，夕食をそのホテルのレストランで食べたらどうか，というマーチンさんの提案であった。しかし，私たちはポートリーにもどってからと考えていたので断った。そのホテルには，別棟があってFlodigarry Cottageというらしい。マーチンさんによると，フローラ・マクドナルドが夫とともに住んでいたことがあるのがそのコテージで，今はホテルの一部となっており，泊まりたければ宿泊可能であるという。そのコテージについては，後に改めてふれる。

海岸線では牛が放牧されているStaffin Bayにも立ち寄った。そこからまもなくしてスカイ島で屈指の名所となっている岸壁から海に落ちる滝Kilt Rockに圧倒された。この地形も火山活動の結果できたものであるらしい。この時にすでに時計は20時35分を回っていた。ひた走りに走って，21時20分ポートリーへ帰還した。マーチンさんに請求額の80ポンドを支払い，10ポンドをチップとして渡す。お土産として甘いチョコレートクッキー二箱を各自がいただく。

2.7　ジャコバイトの乱とフローラ・マクドナルドについて

ところで，なぜフローラ・マクドナルドがいまもハイランドの人々の間でこれほどまでに親しまれているのであろうか。この点は，スコットラン

ド滞在中には詳しく分からなかったので，後日文献で調べてみた。その結果分かったのは次のようなことである。

フローラの理解のためには，ジャコバイトの乱にふれることが不可欠である。「グレンコーの虐殺」に関係して先述した名誉革命の後，初めはフランスへ，そしてその後はイタリアに亡命していたスチュアート朝のジェームズ7世(イングランド王としてはジェームズ2世として在位, 1685-1688)と彼の子孫を支持した人々のことをジャコバイトという。これは彼のラテン語名が Jacobus であったことに由来する。そして，スチュワート朝の復興を願う人々の政治運動をジャコバイト運動といい, それは 1688 年から 1745 年まで続いた。

この運動は，特にスコットランドとウェールズで強力であり，そこでは，運動の性格は主としてスチュワート朝の正統性を主張するものであった。アイルランドでも強力だったが，そこでは主として宗教的なものであった。そこでのローマ・カトリック教徒は，歴史の経緯からして当然ジャコバイトであった。

ジャコバイトの乱は，そうしたジャコバイト運動の中で発生した蜂起のことである。その原因は一つではなく，スコットランドの場合，ハイランドとローランドの歴史的対立やカトリックと長老派教会の対立，ハノーヴァー朝への不満などさまざまな原因があった。キレーン（2002）がこの反乱への参加者の心情について述べているが，それによると，ある者は，単純に合法的な王権の尊厳を信じる正統主義者であり，ある者は，ドイツ系の王家よりもスコットランド出身の王家を重んじたナショナリストであり，またある者は，長老派教会との執拗な軋轢に苦しんだハイランドのカトリック教徒，あるいはマリの主教主義者。「彼らはロンドンに抵抗しただけでなく，エディンバラの新体制に対しても等しくて抵抗した」(同上，153頁)。

1718 年，ハノーヴァー家のジョージ 1 世（1660-1727，在位 1714-1727）

が戴冠した。しかし，彼は英語もろくに話せず，多くの時期をドイツのハノーヴァーで過ごしたという。そういう人物がスコットランドの王であるとすれば，人々の間に強い不満が渦巻いたとしても不思議ではない。正確にいうと，名誉革命(1688-1689)以後の60年間に蜂起が5回あった。1690年，1708年，1715年，1719年(スペインの支援を受けたスコットランドのハイランドでの蜂起)，そして最後の5回目が1745年のものである。

その背景としては，1743年に英仏間に戦争が勃発したことがあった。当時フランスには，先述のジェームズ7世(イングランド王ジェームズ2世)の孫にあたるチャーリがいた。彼は，正式にはチャールズ・エドワード・ルイス・フィリップ・カシミア王子（1720-1788）といい，通称ではボニ・プリンス・チャーリであった。彼は，イングランドとフランスの間の戦争を見て，スコットランド王位を狙うチャンス到来と考えた。フランス側は，彼を支援すると約束していた。この支援はいざとなると得られなかったのであるが，チャーリは，ハイランドの氏族たちが支援してくれるはずであると判断し，1745年，先ずはアウター・ヘブリデス諸島のうちのエリスケイ島（Isle of Eriskay）に上陸した。それはサウス・ユイスト島からエリスケイ海峡（Sound of Eriskay）を挟んだすぐ南の島である。小さな島だが，その南西にはそれよりやや大きいバラ(Barra)島がある。彼は，そのエリスケイ島を出発点として軍を編成し，スコットランド本土に向かった。

1745年の状況は，客観的にはジャコバイト側にとって展望のないものであった。蜂起したハイランド人の数は，1715年の時より少なかった。ローランドの人々は，これに無関心か，あるいは敵対心をいだくかのどちらかであった。しかし，若くハンサムな王子の魅力と，イングランド政府軍が当時は大陸で戦っていて，グレート・ブリテン島にいなかったことが蜂起を相対的に大きく見せた。数週間だけではあったが，チャーリはスコットランドの王者であり，9月21日のプレストンパンズ(Prestonpans)の戦いの勝者であった。彼は南に進撃し，12月4日にはイングランドのダービー

にまで攻め入り，翌1746年の1月17日には，キルカーク（Kilkirk）での戦いに勝利を収めてからハイランドに退却した。

しかし，同年4月16日，カンバーランド侯爵（Duke of Cumberland）のオーガスタ（William Augustus）がインヴァネス近郊のカロドン（Culloden）でジャコバイトを殲滅した。反乱者のうち約80人が直ちに処刑され，多くが追跡を受けて殺されたり，あるいは逃亡したりした。チャーリは数ヶ月にわたって政府の執拗な追跡を受けた。彼の首には3万ポンドの賞金がかけられた（Britannica：Micropaedia, 1994, pp. 464）。

そこで歴史の舞台に登場してくるのがフローラ・マクドナルドである。彼女は，1722年，アウター・ヘブリデス諸島中のサウス・ユイスト（South Oist）島のミルトンに誕生した。父のマクドナルド（Ranald Macdnald）は，ミルトンのtacksman[3]ないしは自作農であった。彼女は，エディンバラで教育を受けた。

ところで，フローラが兄弟を訪ねて，生まれ故郷のサウス・ユイスト島に遊びに来ていた際に，ヘブリデス諸島中を逃げ回っていたチャーリがその島に逃げて来たのである。島の人々は，それが逃亡中のチャーリであることを知った。その中にはジャコバイトもいたかもしれない。そうであれば，自分たちが希望の星を仰いでいた彼を何とか安全なところに逃がしてあげたいと思ったことであろう。もう一方で，スチュアート朝の再興などありえないと考えた人々もいたであろう。もし彼がサウス・ユイスト島で捕まることになれば，イングランド軍は，島民が彼をかくまっていたとして，島民全体に残酷な仕打ちをする可能性が大いにある。同じ捕まるのであれば，サウス・ユイスト島以外のところで捕まってほしい。そういう醒めた判断があったようである。しかし，そのためにはどこへ彼を送り出すのがよいのか，またその場所を決めたとしても，誰がその手引きをするのか。フローラの母が，スカイ島のアーマデイル（Armadale[4]）に住んでいた。フローラはまだ若いにも関わらず，サウス・ユイスト島生まれの女性

として最もしっかりした人物であることを皆が知っていた。そこで島の有力者が彼女に白羽の矢を立て，彼女の手引きでスカイ島にチャーリを送り込む計画を立てた。フローラは，その計画を聞いて，初めは躊躇したらしいが，やがて説得させられたという。

その計画とは，“若いハイランドの淑女”が，身の回りの世話をやくアイルランド人のメイドを雇い，スカイ島に住む母を訪ねる航海に出る，というふれこみでチャーリをサウス・ユイスト島から逃がし，スカイ島で国外に出るチャンスを探る，というものであった。このためチャーリを女装させ，ベティ・バーク（Betty Berke）という女であることにした。そして，マクイートン（Neil MacEaton）という人物が付き添い，フローラと「ベティ」を乗せた船を8人の乗組員が操る体勢が整い，イングランド人からスカイ島に渡る許可を得た。こうして一行は，スカイ島を目指した。

スカイ島東部への上陸は，6月29日（日曜日）の午後遅くであった。上陸地点は，地名としては Allt a' Chuain というところで，MacDonald (2000) の地図によれば，今日では「チャールズ王子の洞窟」(Prince Charles's Cave) と呼ばれる洞窟のある海岸である。別の地図では，そこは「王子のポイント」(Prince's Point) とも記されている。ポートリーの東北東の海岸である（MacDonald, 2000, pp. 49)。

上陸すると，チャーリは，女装のまま，その洞窟に身を潜めることにし，フローラは，マンクスタット・ハウス（Monkstadt House）に向かった。そこは彼女の叔母（ないし伯母）であるマーガレットが隠れ家に使ってよいといっていたところであった。そのマーガレットは，アレクサンダー・マクドナルド卿（Sir Alexander MacDonald）の妻であった。その日彼自身は家にいなかったが，彼の土地差配人であるキングズバラのマクドナルドがそこにいた。ちなみにフローラが後に結婚する相手は，このキングズバラのマクドナルドの息子である。彼は，上陸地点に向かい，チャーリに食料と飲み物を届けた。そうしている間にフローラはどうしたかというと，

「ハイランドの若い淑女」として振る舞い，Monkstadt で宿営していたイングランド軍の何人かと食事をしていた。これは，彼らがチャーリの行方に関心を向け続けるのをそらすための演技であった。

夜が更けるとキングズバラのマクドナルドは，チャーリに対し，自分に従って夜を徹してキングズバラに行くことを提案した。それはマンクスタット・ハウスから約 20 キロ（約 12 マイル）のところであったが，チャーリとしては，それが安全策なら反対する理由はなかった。こうして二人は，夜中中歩き続けて翌朝早くにキングズバラに着いた。チャーリは女装のままであった。他方フローラは，先述のマクイートンに伴われて，別の道を通ってキングズバラに着き，そこでチャーリと合流し，そこに一泊した。その翌日，フローラ，チャーリ，キングズバラのマクドナルドはキングズバラを去り，ポートリーに着いた。その翌日にフローラとチャーリはそこで別れ，以後二人が会うことはなかった（MacDonald, 2000, p. 50）。別れの場所は，MacNab's Inn であり，今もその建物は Royal Hotel として存在している。

フローラと別れたチャーリは，1746 年 9 月 19 日，フランスの船に拾われ，無事フランスへ逃げることに成功した。その一方，イングランド側は間もなくフローラが何をしたかを知るに至った。そして彼女を逮捕し，初めはダンスタフナージ城（Dunstaffnage Castle）に収監した。その後間もなく，そこからロンドン塔に移された。しかし，1747 年に 1745 年蜂起の参加者に対する恩赦があり，これに伴い同年 7 月，フローラは釈放された。ロンドンの淑女たちは彼女の身の上に同情し，当時としてはかなりの大金である 1,500 ポンドの醵金を行い，彼女に与えた。彼女は，それを持ってエディンバラに帰り，しばらくは仮名でそこに住んだ。意外に早く釈放されたこと，大金を持っていたこと，により，何か不正な方法でそうしたのではないかという人々の猜疑心があった模様である。そのあと，母の元へ移り住み，その 3 年後，彼女はキングズバラのアラン・マクドナルドと結

婚した。

1751年の春，二人はフロディギャリー(Flodigarry)に移って，Flodigarry Cottageに3年間住んだ。現在そこは，前述のFlodigarry County House Hotelの一部となっている。7人の子供のうち，5人はそこで生まれている。1759年，一家はアランの父の土地であるキングズバラに移る。

しかし，そこでの生活は苦しく，1774年，彼らは北米大陸東部のノース・カロライナ（現在の米国ノース・カロライナ州）に移住した。そこは，ハイランドからの移民の多いところであった。ケープ・フィア（Cape Fear）に着き，その後，ファイエットヴィル(Fayetteville)の町の近くに居を構えた(Website：North Carolina)。独立戦争に際してアランは英国側として戦闘に参加し，捕虜になった。そしてカナダのノヴァ・スコシア送りになった。このためフローラは，生活の目途が立たなくなり，1780年8月，単独でスコットランドにもどった。アランは後に解放され，スコットランドに帰り，フローラと合流できた。

フローラは，スカイ島のKingsburgh Houseに近いPenduinにて，1790年3月5日病死した。しかし，人々は彼女を忘れていなかった。葬儀には，ハイランドでかつて見られたうち最大の数といわれる3,000人が集まったとされる。アランも同年9月に死去した（MacDonald, 2000, pp. 47-50)。

マーチンさんの案内で私たちが訪ねたKulmuir Graveyardのフローラの墓石は，ケルト十字である。

以上を手短にまとめると，血筋からいえばスコットランド王となる正統性を有するチャーリであったが，名誉革命以後のスコットランドとイングランドの政治事情は，彼に味方することはなかった。しかし，ジャコバイトの乱として最後のものとなった1745年の蜂起が無残な失敗に終った後，チャーリは捕らえられて処刑されるとか，終身刑に処せられるとかしたわけではなく，あるいはイングランド軍の前に剣を抜いて立ち向かって殺さ

れたわけでもなかった。彼より2歳若い女性，すなわちフローラの命がけといってよい逃亡補助行動によってフランスに逃げることに成功した。だが，そこで再起を図ったわけでもなく，43年間をほとんど無為のうちに過ごし，アルコール中毒になって死んだのである。これに対しフローラは，ロンドン塔への収監という苦難に見舞われ，やがて釈放されて普通の結婚をするものの，夫との生活は経済的に楽なものではなく，一時期北米大陸への移住を余儀なくされた。それでも五人の子の母として毅然と生き抜き，スカイ島に帰り，そこで68年の生涯を終えた。これら二人の人物の人生はあまりにも対照的であり，ジャコバイトの乱が語られるとき，多くのスコットランド人が，一連の蜂起に直接には何の関係もなかったフローラ・マクドナルドを，「ハイランドに咲いた花」として今も思い起こすのである。

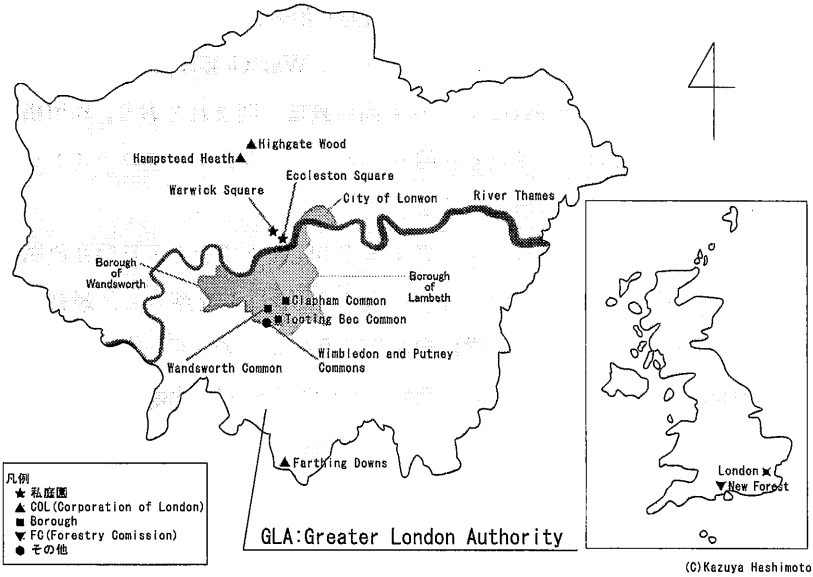
3，ロンドンのオープンスペース

3.1 スカイ島からロンドンへ

スカイ島の調査を終え，8月7日，朝9時15分ポートリー発のバスに乗り，インヴァネス経由でロンドンに戻る。バス料金は一人12ポンド。インヴァネスに向かう中，鬱蒼とした森林地帯を抜けてネス湖（Loch Ness）へ出る。この辺りの森林は広葉樹中心となるが，マツ科やモミ・ツガ系らしい針葉樹もある。スカイ島で見たのとは全く異なる景観で，やや日本の山間部に似た印象を受ける。ネス湖は，グレート・グレン断層という長大な断層の一部であり，その断層湖周囲の景観が美しいのと，幻の怪獣「ネッシー」の話とで，左岸一帯が一大観光地になっている。

インヴァネスには午後過ぎに着き，先ずはバスターミナルに荷物を預ける。一個につき3ポンドとかなり高価。インヴァネス市内を散策し，ネス川を渡り，パブ（Public Bar）で一休みした後，空港へと向かう。理由は未だにはっきりしないが，約2時間出発が遅れて，19時20分，ようやくイ

地図 3：訪問したロンドンおよびイングランド南部のコモン等の位置と管理主体



(C)Kazuya Hashimoto

ンヴァネス空港を離陸した。そのあとは問題なくガトウィック空港に着陸し，そこからは空港特急 Gatwick Express で，ノンストップでヴィクトリア駅まで向かった。ヴィクトリア駅からは歩いて，日本で既にネット予約していた Carlton Hotel をめざす。そこの 214 室に泊まったが，清潔ではあるがなんとも窮屈な部屋だった。

翌 8 日は陽射しのきつい日であった。この日から私たちは，ロンドンのオープンスペースをできるだけ多く見ようと意気込んでいた。オープンスペースとは，一言で言うと「1965 年入会地登録法」(The Commons Registration Act 1965) に基づく入会権者（コモナー）を含む公衆がアクセスできるレクレーションやアメニティの場を指す。すなわち，土地所有権とは関係のない地表の使用権に限定された空間のことである。当然，入会権者と公衆ではアクセスできる範囲に違いは生じる。ロンドンでのオープンスペ

ースは，緑の多い開放空間で，都市公園の色彩が濃く出ているものが多い。

10時過ぎにホテルを離れ，私たちはチューブに乗り込むためヴィクトリア駅まで徒歩で向かった。その途中，大通り沿いにみごとな高木の生い茂る私設の緑地庭園が2ヶ所もあった。一つはWarwick Square，もう一つはEccleston Squareである。いずれも高い鉄柵で囲まれており，利用権者のみにゲートの合鍵が渡される仕組みである。このようなクローズドな緑地庭園はロンドンの至る所にあるようだ。

ヴィクトリア駅に到着後，エリア4までの範囲までなら1日乗り放題というチューブ（Tube）のチケット（一人4.8ポンド）を購入し，最初のオープンスペースのコモンの見学に向かう。それは，ノーザン（Northern）線のHighgate駅すぐ側にあるハイゲート・ウッド（Highgate Wood）である。

3.2 ハイゲート・ウッドおよびハムステッド・ヒース

ハイゲート・ウッドは，ロンドン北部の丘陵地帯に位置し，面積は約28ヘクタール。自治法人ロンドン（Corporation of London）が管理している。Hornbeam coppiceが特徴とパンフレットにあるが，hornbeamとはシデのことである。1886年，the Ecclesiastical Commissionersによって自治法人ロンドンに移管されている。ハイゲート・ウッドの中を歩いていると，このオープンスペースの一つの特徴とされるコピス・フォレスト・ゾーンに入る。ブナ科ナラ属（Quercus）のオーク（Quercus robur）の木が実に見事にはえていた。そこには，コピス方式，木の根本から伐採する方式，で伐られた樹木の切り株から，萌芽更新をする木々を見ることができる。このハイゲート・ウッドでは，ごくわずかなエリアにおいて自然の再生産を促すために柵で囲い込みがされている。鳥の群れが，近年，その種類においても数においても急増してきており，狐やリス，それに5種類の蝙蝠，180種類の蛾，12種類の蝶々，80種にのぼる蜘蛛などと同じく，

写真5：ハイゲート・ウッドのコピス式による萌芽更新（撮影：泉留維）

写真6：ケンウッド内の昼の風景（撮影：泉留維）

70種類の鳥が観察・記録されている（Website：Highgate Wood）。森の中を散策した後，ハイゲート・ウッドの中心のフットボールやクリケットができる広場横のWildlife Information Hutに到着。木造の資料小屋であり，地元の環境教育的な色彩を放っている展示の仕様である。

一通りハイゲート・ウッド内を見てから，そのままずっと歩いて次のオープンスペースであるケンウッド（Kenwood）ならびにハムステッド・ヒース（Hampstead Heath）へ向かう。それにしても，草地で日光浴する人，ほぼ上半身は裸状態の人たちの数が実に多い。その一方で，直射日光を避けて木陰の草地を選んでいる人の数も多い。

ケンウッドはケンウッド・ハウスとして知られ，草地と森と湖に囲まれた邸宅のあるオープンスペースである。その前身としてのケンウッド・ハウスは，1754年から1922年にかけてマンスフィールド家のものであり，同家の人々が実際ずっとそこに住んでいた。しかし1920年代に入ると，同家はそのエステートを従来の庭園とは異なる形の開発対象にしようとした。そのことを知り，従来のままそこを庭園として維持できないかと考えるようになった人々がいた。その一人が，初代Iveagh伯としてのギネス（Edward Cecil Guiness, 1847-1927）である。ギネス醸造会社の創立者の孫であり，アイルランドのダブリン生まれの彼は，1925年，ケンウッド・ハウスとその周囲の約30ヘクタールを買い取り，邸宅を改装した。そして，それまで長年にわたって自ら収集してきた西洋名画の数々をそこに収納した。そのコレクションは，今日ではThe Iveagh Bequestと呼ばれる（Weinreb, 1983）。

ギネス自身は1927年に亡くなるが，遺言により，邸宅地と絵画のコレクション全体が国民全体のための信託財産になった。その後の変遷についての詳細は略すが，いったん大ロンドン市（The Greater London Council；GLC）の管理下に入り，今では「イングランド遺産協会」（English Heritage）という団体がケンウッド・ハウスならびにThe Iveagh Bequestの全体を管理している（Website：Kenwood House）。ハムステッド・ヒースと境界なしにつながっているので，ケンウッドもハムステッド・ヒースの一部と見なす場合もある。

建造物としてみる場合のケンウッド・ハウスについていえば，その一部

は，今では The Iveagh Bequest を展示する美術館になっており，世界中から絵画ファンが訪ねてくる所になっている。私たちは，そこでフェルメールを観ることができた。「ギター奏者」(The Guitar Player) と題されたものである。「15，6 年前に盗難にあったといういわくつきの作品である」と館員がフェルメール・ファンらしき女性に説明している。正確には 1974 年に盗難にあったものである。後にロンドン市内のある墓地に置き去りにされているのが見つかり，ケンウッド・ハウスに無事もどった。杖らしきものを持つレンブラントの晩年期の自画像があるかと思えば，グァルディ，ブーシェなどもある。ターナーも一点展示されていた。とにかくすばらしい作品群であるが，入場料は無料である。

そのあとで私たちはハムステッド・ヒースを歩いた。ハムステッド・ヒースは，大ロンドン市内にあり，その面積はカムデン (Camden) 区に属する部分約 275 ヘクタールとバーネット (Barnet) 区に属する部分約 45 ヘクタールを合わせて約 320 ヘクタールである。この総面積には，先述の「イングランド遺産協会」が管理しているケンウッドの約 45 ヘクタール分も含まれている。現在，このケンウッドを除いた部分が自治法人ロンドンの管理下にある (Website：Hampstead Heath)。しかし，もともとは 1871 年から 1906 年にかけて制定された様々な議会法の下，大ロンドン市 (GLC) によって取得，管理されていたもので，1986 年にサッチャー政権下で GLC が廃止となり，その影響で 1989 年より自治法人ロンドンの管理下に移っている。

ハムステッド・ヒースは，ハイゲート・ウッドよりもロンドン中心部から近く，わずかに 6 キロ程度しか離れていない。そのような近郊に膨大な緑地ならびに林地があるのだ。25 の主たる池に加え，太古からの林地，湿地，列状の生垣地帯，そして草地を有している。薪炭用であろうポラード (Pollard) 式といわれる大人の背丈ほどの高さで伐られた広葉樹もあちこちで見られる。数百万人もの人がふれることができる身近な自然であるため，

私たちが行ったときも木の数と同じぐらい人がいたと言っても過言ではない。かなり濁っているが，池で泳ぐ人もけっこういる。一番見晴らしが良く，ロンドンの中心を眺めることができ，ジョン・コンスタブルも描いたパーラメント・ヒル（Parliament Hill）では，凧揚げを楽しむ人々がかなりの数でいた。子供より大人のほうが真剣に揚げている。一年を通じて様々な催し物があり，ジャズ・コンサート，釣り教室，ファン・フェアー，定期ウォーキングや自然体験教室等が開催されている（Website：Hampstead Heath）。

3.3　自治法人ロンドンとオープンスペース

ハイゲート・ウッドもハムステッド・ヒースも，それを保有し，第一義的に管理する責任を負っているのは自治法人ロンドンである。もちろん，例えばハムステッド・ヒースの場合，ヒースの管理委員会と諮問委員会に代表される地域諸組織と密接に協働はしている。ところでこの自治法人ロンドンとはいったいどういう組織なのか。一地方行政組織ではあるが，非常に特徴的な組織でもある。

現在の首都ロンドンには，東京23区に該当するものとして自治法人ロンドン（ザ・シティ）と32のロンドン・バラ（Greater London Borough）からなる大ロンドン市（Greater London Authority；GLA）があるが，この2つを包括する自治組織，例えば東京都に相当するような組織体は存在していない。この自治法人ロンドンと各バラが，オープンスペース化したコモンをそれぞれ所有・管理し，都市住民に憩いの場として提供している。バラが管理するオープンスペースについては，後ほど取り上げるとして，まず自治法人ロンドンのオープンスペースについて取り上げる。だが，その前に自治法人ロンドンについて紹介しておく。それは日本にはない制度を持つ独特の自治組織であるからである。

自治法人ロンドン（Corporation of London）は，地方行政サービスを

イギリスの金融と商業の中心であるロンドン・シティ（ザ・シティ；City of London)に提供している機関である。ザ・シティは，テムズ川(River Thames)の北岸の面積2.5平方キロほどの半月状の町であり，住民は一万人にも満たないが，昼間の人口は30万人を超える世界に名だたる金融，経済の中心都市である。この自治体が提供するサービス自体は，基本的には他の地方自治体とそれほど異なるわけではない。通常の地方行政サービスである住宅，ゴミ収集，教育，社会サービス，保健衛生，都市計画などがあげられるが，いくつか特別なサービスも提供している。例えば独自の自治警察，刑事裁判所を運営している。さらに，自治法人ロンドンは，自らの領域(ザ・シティ）外でもサービスの提供を行っている。その一つが，エッピング・フォレストやハムステッド・ヒースといったオープンスペースである。

自治法人ロンドンは，イギリス議会よりも歴史は古く，中世以来の組織であり，イングランドでもっとも古い地方政府である。そもそも自治法人ロンドンは，ヘンリー1世（在位1100-35）治下の12世紀初めにいくつかの区に分けられ治安判事（sheriff）の管轄区となり（平凡社大百科事典電子版），ジョン欠地王(在位1199-1216)の時代に市参事会(Court of Alderman）や「市長」(Lord Mayor）選出などの制度を整えて自治権を確立した頃までさかのぼることができる。ただ他の都市のように国王の特許上による法人ではなく，慣例的権利による法人である（下条，1995，207頁)。中世からの組織であることで行政システムには，その名残が未だにある。

「市長」を筆頭に，立法機関であり執行機関である25の選挙区（wards）毎に選挙で選ばれる市会（Court of Common Council）の153名の議員，そしてそこから選出される24名の長老議員（Alderman）による非政党政治を基盤にしている。「市長」は，長老議員と現「市長」による参事会(Court of Alderman）で選出される。この都市を管理しているのは，公選制による住民代表ではなく，中世以来存在する同業者（職業ギルド）組合（City Livery Companies）とザ・シティ内に不動産を所有している選挙登録者の

代表，つまり「市長」や市会である。ちなみに2000年に大ロンドン市(GLA)がイギリス始まって以来といわれる公選制の市長選挙を実施したことは有名であるが，自治法人ロンドンの「市長」は名誉職に近いが1192年以来，地域の市民代表として長老議員の中から選出され続けてきている(Website：Lord Mayor)。

自治法人ロンドンは，同じ首都ロンドンの自治体ではあるが，ロンドン・バラとは大きく異なった行政機能を持っている。歴史的な遠因もさることながら，住宅都市ではなく，ロンドン内外から人が集まる金融機関，商社，海運会社を中心とした都市となっていることも影響し，その差異が生じたと考えられる。それは先述の独自の警察を保有していることもあるが，①行政組織及びその運営は自己の意思で修正・変更しうる，②自主財源(city's cash）を使用して独自の事業活動が可能である。不動産や有価証券を多数所有しており，他にも学校や公営市場，そしてオープンスペースの公園を保有しているということである。ロンドン・バラも，オープンスペース化した都市公園を保有はしているが，その整備具合は一目瞭然なほど差がある。[5)]

現在，自治法人ロンドンは，大きく分けて8ヶ所[6)]のオープンスペースを保有，管理しているが，そもそも自治法人ロンドンがこのようなことを行うようになったのは歴史的な要因が深く関係している。その詳細については，平松紘『イギリス環境法の基礎研究』に譲るとして，ここでは簡潔に近代以降の流れを押さえておく。

都市部におけるコモンズのオープンスペース化による都市公園形成は，後述のウィンブルドン・コモンがその先達であるが，その流れを法的に決定づけたのは「1866年首都圏入会地法」(the Metropolitan Common Act of 1866）であろう。この法律では，首都圏警察区域内のコモンズの囲い込みを全面的に禁止し，市民のレクレーションとスポーツの場としてのオープンスペースにすることを定めた。さらに1878年の「改正首都圏入会地法」

により，入会権が付随する保有財産の買収権限を自治法人ロンドンに与え，同年の「ロンドン・オープンスペース法」(the Corporation of London Open

表—1　自治法人ロンドンが管理するオープンスペースについて

	法人ロンドンの管理下に入った年	03年度純支出(万ポンド)	規模(ha)	担当職員[7]	スポーツ競技場の有無	その他
Hampstead Heath	1989	500.8	274	127	○	乗馬
Epping Forest	1878	420.9	3,188	98	○	乗馬・放牧
West Ham Park	1874	84.4	36	26	○	トリムトレール
Queen's Park	1886	70.6	12	11	○	トリムトレール
Burnham Beeches	1880	69.3	218	10	×	オリエンテーリング・放牧
Ashtead Common	1991	44.7	202	6	×	乗馬・放牧
Highgate Wood	1886	37.9	28	8	○	—
City gardens	—	158.7	9	5	—	—
West Wickham & Coulsdon Commons	—	115.2	265	14	—	—
Farthing Downs	1883	—	49	—	×	放牧
Coulsdon Common	1883	—	51	—	○	オリエンテーリング・放牧
Kenley Common	1883	—	56	—	×	放牧
Riddlesdown	1883	—	44	—	×	放牧
Spring Park	1926	—	21	—	○	—
West Wickham Common	1892	—	10	—	×	—
New Hill	2002	—	34	—	×	放牧
合計		1,909.4	4,229	317		

(出典) Open Spaces Department (2003), (2004) や自治法人ロンドンのHP等より筆者作成

Spaces Act 1878）では自治法人ロンドンから約40キロ以内のコモンズの取得権と管理権を自治法人ロンドンに付与することが決まった。この1878年法に基づき，近郊の農村部の入会地であったバーンハム・ビーチ（Burnham Beeches）やエッピング・フォレスト（Epping Forest），そしてファージング・ダウンズ（Farthing Downs）を始めとするクロイドンとボロムリーボロの南方にある7ヶ所のコモン（Farthing Downs，Coulsdon Common，Kenley Common，Riddlesdown，Spring Park，West Wickham Common，New Hill）が続々と取得されていった。

自治法人ロンドンのオープンスペースに関する年次報告書（2002／2003年）の冒頭には，チェアマン達のコメントが載っているのだが，そこには「自治法人ロンドンは，100年以上に渡ってロンドン内外のオープンスペースを保全する義務を担ってきており，近年では1989年にハムステッド・ヒース，さらに2003年にはファージング・ダウンズの側にあるニューヒルの管理を受け持つようになっている」とあり，オープンスペースを保全することに誇りを持ち，さらに今でも都市住民へのサービスを拡張するために新たに取得し続けていることが伺える。

3.4　広大なオープンスペースであるニューフォレスト

ロンドン中心部のオープンスペースを見た翌日9日は，イングランド南部のコモン，ニューフォレスト（New Forest）を目指した。ヴィクトリア駅からウォータールー駅にチューブで移動し，12時30分発のウェイマス（Weymouth）行きに乗車。ナショナル・レイルのBrockenhurst駅には13時59分着であった。たまたま途中停車駅の最も少ない列車に乗ったが，多く停まるものだと約2時間はかかる。私たちの乗った列車の停車駅は，Working, Winchester, Southampton Airport, Southampton Centralであった。

私たちは，駅を降りてから北に向かって歩く。リンドハースト（Lyndhurst）

の町にニューフォレストのインフォメーション・センターのあることが地図でわかったので，そこを目指すことにしたのである。地図上の直線距離でおよそ4キロである。交通量のきわめて多い道（A 337）で，しかも天気は雨。車道から右にそれることにして森の中を歩く。牛とポニーを多数見かける。1999年現在の数値として，2,300頭の牛，3,400頭のポニー，70頭のロバがニューフォレストで放牧されている（Ponting, 2002）。彼らは，雨はあまり気にしていない様子であった。それにしても駅から近い道路沿いには，一面キャンプサイトとなっていて，キャンプを楽しむ人々の数がきわめて多いことがわかる。

足下が悪く濡れてしまったが森の中をかなり歩くことができたのはよかった。森を見なければ，何のためにニューフォレストに来たのか意味がないからである。A 337からなるべくつかず離れずに森の中を歩いていたつもりだが，あとから考えるとKing's Hat方面へかなり東にそれたらしく，途中で軌道修正した。Clayhill Heathのところからは，鬱蒼とした樹木に覆われ始め森の中を歩くのが難しそうになったので，道路に出る。歩道が整備されていないことにぶつぶつ文句をいいながら。英国は，「歩け，歩け」でフットパスの整備については世界一なのかもしれないが，郊外に行けば自動車道沿いにはほとんどまともな歩道が存在しない。この点では最近の日本の方が格段に良い。

リンドハーストのインフォメーション・センターは，雨の日の夕方にもかかわらず，かなりの人で賑わっていた。センターには付属して，おみやげ物を売っているのはともかく，地元の文献を集めた本屋や資料館があり，子どもから専門家まで満足してもらえるような形になっている。それにしても，コモナー（commoner）とは，日本語でいえば入会権者であるが，そうしたコモナーのガイドによるニューフォレスト各地のツアーなども組織されているようである。入会権者という言葉が，日本だけでなく，今日のイングランドにもそうして生きているのに感銘を受けた。

ノルマン・コンクエスト（1066年）を成し遂げたノルマンディー公ウィリアムがシカ狩のために確保したのが今日のニューフォレストの起源である。15世紀以降，王室の狩猟に対する興味は次第に薄くなり，木材生産を目的としたフォレストの囲い込みが進んだが，1877年法[8]により森林オープンスペースとして確立し，現在では面積67,000ヘクタールという広大なエリアが開放されている。森林，ヒース，湿原など生物の多様性に富んでいるため，憩いの場，レクレーションの場としてロンドンなどの都市住民によく利用されている。ただ，旧来からの入会権に基づく近隣住民（コモナー）の暮らしと都市住民の憩いの場としての利用参入の間に軋轢が生じている。1924年以降，ニューフォレストは，国のForestry Commissionの管理下におかれ，森林裁判官（Verderers）がそのような利害調整にあたっている（三俣・室田，2005）。

ニューフォレストの端，サザンプトンの西の郊外，テスト川河口近くの右岸ではEling Tide Millという潮汐水車が現役稼動している。実際に小麦製粉に使われていることが，インフォメーション・センターのチラシでわかった。900年以上昔にニューフォレストの端に建てられ，18世紀に今日の形の建物ができ，1940年代にはいったん放棄されたが，1975年に修復がなされ，1980年に再度稼働し始めた。イギリスで唯一の現役でかつ生産を行っている潮汐水車である（Website：Eling Tide Mill）。

リンドハーストの町では，Brockenhurst駅に向かうためのバス停探しに随分時間をとってしまった。時刻表では19時13分発で駅には19時23分着予定であったのだが，なかなかバスが到着しなかった。5分遅れくらいできたバスは猛スピードで，私たちがとぼとぼと歩いたA 337を突っ切り，さらにBrockenhurstを19時26分に発車するはずの電車も偶然5分くらい遅れての到着だったため，なんとか予定の電車に乗り，ロンドン市街に戻った。

3.5　ロンドンエリアの様々なオープンスペース

8月10日は，三人とも別行動をしてそれぞれの見たい場所を見学する日とした。予定では，三俣がクールドン・コモンなどの郊外にあるコモン数ヶ所を訪ね，室田はウェールズを一度も訪ねたことがないので，日帰りではあるがとにかくカーディフに行ってくることにし，泉がボストン・コモンの研究に関係するセント・ジェームズ・パーク沿いにある The Mall を訪ねる，というような具合でそれぞれホテルを出た。結果を先取りして言うと，室田は，日帰りでのカーディフ行きは強行軍になり過ぎると後で考え直し，ロンドンにとどまり，そこでのコモン見学に予定を変え，そのために，三俣とこの日ほぼおなじ場所を別ルートで，違う時間に見ることになった。

3.5.1　London Borough of Wandsworth の管理するワンズワース・コモン

三俣は，10時47分ヴィクトリア駅発のナショナル・レイルのノーザン（Northern）線に乗り，London Borough of Wandsworth の管理するコモン2ヶ所のうちまずはワンズワース・コモンを訪ねた。ちょうど1時間ほどあとに，室田はチューブを利用し Balham を下車してワンズワースに向かっていた。ワンズワース・コモン駅周辺は，ゴミが散らかり決してきれいとはいえない。Bolingbroke Grove という通りと Bellevue road. Nightingale という通りとの交差点が駅から一番近い。そしてこのあたりから鉄道線路両側にまたがって，北にワンズワース・コモンは広がっている。Bolingbroke Grove をそのまま歩いてゆけば，ワンズワース・コモンより一つヴィクトリア駅寄りのクラッパム・ジャンクション駅に至る。

雨が降っていたためひとけがなかったものの，次第に雨がやんでくると，かなりの人がコモンに現れた。特に多いのは，ベビーカーを引く子供連れのお母さんの姿である。ロンドンのコモンの特徴として，子供専用のスペースが確保されており，そこには決まって柵が設置されている。コモン全

体は囲い込まれることはないが，コモンの中の子供のための場所だけは，その安全上，囲い込むのであるという旨の記述がところどころでみえた。ここワンズワースの場合には，ブランコや遊具だけでなく，子供のための立派な施設がコモン内にあり，その入り口には，“Bolingbroke Grove One O' clock Centre For Children under 5 years accompanied by an adult”とある。

ワンズワース・コモンは，地域住民からつよい関心をもって管理されているトゥーティング・コモンと大変よく似た特徴を有しているということがウェブサイトに書かれているが，その面積175ヘクタールのうち73ヘクタールが，生態的に，また景観に優れた場所で，テニスやボーリングなどスポーツをする場所，湖，整然とした小道からなっている。このコモンで見かけた釣りに関しては，季節によってメンバーシップであるそうだ(Website：Wandsworth Common)。同ウェブサイト情報によると，ワンズワース・コモンは重要な歴史的コモンであるという。かつてウェストヒースやワンズワース・イーストヒースを含む数多くの名称で呼ばれた，広範囲にわたって存在したコモンの生き残りである。19世紀までには，ロンドンの発展にともなって，コモンは鉄道建設で細分化され，また建物の建設ですっかり侵食されてしまい，その結果，1794年から1866年の間に53ヶ所が囲い込まれたそうである。一般的に言って，イングランドにおいては，運河の開鑿（主に18世紀），鉄道建設（19世紀）に際して消滅したコモンが多いとされる（室田・三俣，2004，118頁)。しかし，ワンズワース・コモンも次のトゥーティング・コモンともに鉄道建設があったにもかかわらずコモンとして生き延びた（Website：Wandsworth Common)。

町のほうにも出ていろいろ見ていたこともあり，午前中をワンズワースで過ごした三俣がヴィクトリア駅に一旦引き返したのは，13時7分の電車であった。ここから，お目当てだった郊外のコモンの一つであるクールドン・コモンに向かおうとしたが，切符を買う自動販売機がどれも故障中で

あり，券販所で長蛇の列を並んで購入する必要があったため，急遽，予定を変更した。残り時間をロンドンのコモンの見学に当てることにした。そう決めてクラッパム・コモンへと急いだ。

3.5.2 London Borough of Lambeth の管理するクラッパム・コモン

チューブのノーザン線にのり，Clapham common 駅で下車。コモンの入り口付近にある標識には，バンドスタンド，カフェ，子供たちの遊び場，首輪無しで放せる犬のエリア，池，テニスコートなど同コモンのサービス内容 17 項目が書かれており，London Borough of Lambeth とも書かれている。すなわち，ランベス（Lambeth）区の所有・管理下にあるコモンである。ただし帰国後の調べによると，1965 年までは，このクラッパム・コモンはワンズワースボロ内にその全域があったらしい。まず，Clapham common long road をはさんで広がる同コモンの北（地図 3 では小さい三角の形）にある Cock pond と The Parish Church of Holy Trinity Clapham Common を見る。日差しが出てきて汗ばむ陽気となった。池ではロンドン育ちの子供たちが足をつけている。大人も混じっている。木陰で休んでいる人の姿も多い。ぱっと見ただけの印象でもかなりの大木がある。調べてみると，やはり，コモンでは全体として年老いた木々が多いということである。それに加え，ドイツニレ病や強風による損傷がひどくかなりの木々が植えかえられているそうである。

コモン内の教会や池の様子を見ながら，今度は通りを渡ってコモンの南側の部分を見ることにした。すると直ぐにスケートボードを楽しむ若者たちの声が聞こえてきた。ネットボールコートの横の小さな空きスペースに，山型上の台を置いてその高低を滑って楽しんでいる。そのネットボールコートのフェンスには“Permit Holders Only”とかかれている。基本的に万人に開かれたコモン内にもアクセス権を持つものに限定された場所がある。

バンドスタンドのあるコモンの中心部を目指して歩くにつれ，人の数が

次第に増えてきた。特にベビーカーを押して歩く，若い奥様方の姿がとても多い。遠くには子供が遊んでいる姿が小さく見えている。あれもまた子供のための場所なのか。とにかくいってみようと思い歩いていると，右手にバンドスタンドが見え出した。同コモンにあるバンドスタンドは，楽器の演奏などを催すための建物といったふうで，いわば屋根つきの小さな野外音楽堂である。そこにあった案内板によると，地元住民や後援者，それにクラッパム・コモン管理諮問委員会の協力をえながら，バンドスタンドを修繕するとともに，その周辺の環境改善の計画を進めているという。バンドスタンドのまん前にあるカフェにはいって小休憩し，先ほど遠目に見えた子供のための場と思われる方向に歩くことにした。ワンズワース・コモン同様やはり，柵の施された子供の場所が設置されており，そのすぐそばには釣りを楽しむ人や鴨にえさを与える親子連れの姿があった。この池の名は Mount Pond である。近くにあった掲示板に書かれていた情報によれば，“Clapham Angling Preservation Society”という団体があるようで，同池での釣りに関しては，例えば最大でも 48 時間のこととし，そのあとは別の人に釣り場を譲らなくてはならないなどということが決められているようである。

一方，子供のための場所を囲む柵には，“Parents with Young Children Only Dogs not Allowed”とかかれている。なるほど，その中に入って遊んでいる人の姿には，子供とまったく関係のなさそうな人の姿は無いし，犬もいなかった。

3.5.3 London Borough of Wandsworth の区の管理するトゥーティング・ベック・コモン

クラッパム・コモンを一通り見学し終えたときには，時計はもう 16 時を過ぎていた。あまり遠くへはいけないが，せめてあと一つくらいは見たいと思い，そこから程なくして到着できる Tooting Bec Common へと急い

だ。チューブの Tooting Bec 駅で下車して駅周辺の様子をビデオ撮影していると，ファインダーにカーディフへ向かったはずの室田の姿とそっくりな人物が映った。驚いて確かめてみると，やはりそれは室田であった。彼は，ちょうど Tooting Bec Common を見終えて戻ってきて，三俣が先ほど訪れたクラッパム・コモンへ向かおうとするところであった。室田に教えてもらった Tooting Bec road をストリーサム（Streatham）のほうに向かって歩いていくことにした。同コモンは，面積 92 ヘクタールを有し，区のオープンスペースの中では最も広い面積である。10 分ほど歩いたころに池が見えてきた。池の周りでは，数人の人が読書をしたり，話をしていたりしたがここでは釣り人の姿はなかった。この池のある部分は，地図では Tooting Graveney Common となっている。このコモンは Tooting Bec road によって分断されている。同コモンを紹介するウェブサイトには，「ストリーサムにある Tooting Bec Common と Tooting Graveney Common は，かつてミッチハム一円に広がっていたコモンランドの生き残りである」（Website：Tooting Common）と紹介されており，かつては一つのコモンだったことがわかる。更に同ウェブサイトによれば，「ロンドンの人口が増加するにしたがって，土地は，乗馬用に開発され，古いコモンランドの多くは，この開発の脅威の下に置かれた。それはやがて，最終的には 1866 年の首都圏入会地法の議会通過を見ることにつながるのであるが，それまでに，トゥーティングにあったコモンズは，道路や鉄道の建設によって分割されていった」という。ここでいう鉄道とは，1855 年に開設した北部の West End and Crystal Palace line，1861 年に開設された南北を結ぶ the London, Brighton and South Coast line である。

Tooting Bec Common と Tooting Graveney Common を分断するドクタージョンソン通りをわたると Tooting Bec Common となる。子供がサッカーをしている。すぐにフェンスに囲まれたテニスコートが見えてきた。そのフェンスには，「テニスのプレー開始前に，チケット販売書でチケット

を購入するように」と書かれている。ここもまたコモン内のリミテッドエントリーの部分である。そこから程なくして池があるがこちらのほうでは釣り人の姿が見られた。

同コモンで目にとまった興味深いものとして，乗馬道がある。地図にはHorse Rideとなっている。またウェブサイトでは，同コモンの提供するサービスとして，散策道(walks)と並んで，eventsがある。何らかの催しものが提供されるのだろうかと思っていたが，室田の調べによると，eventには動詞として「horse trailsにおいて馬に乗る」という意味がある。いずれにせよ，同コモンでは乗馬が可能であることは確かなのだが，それは乗馬道のみに限るという制限とそれを破った場合には罰則がある。コモン内にもそのことを厳重に認識させようとする次のような内容の標識が立っていた。

すべてのコモンの利用者の安全のために，乗馬をするものはコモン内の定められた乗馬ルートを守るべし。コモン内の定められた場所以外で馬を走らせることを許した場合，責任者は，条例によって起訴される可能性がある。

残念ながら，乗馬を楽しむ人の姿を見ることはできなかったが，それが可能であることだけは理解できた。

3.5.4 ウィンブルドン・コモンとファージング・ダウンズ

三俣，室田とは異なり，泉は，三俣とのアメリカのボストン市にあるボストン・コモンの共著論文の情報収集のため，まずバッキンガム宮殿近くのセント・ジェームズ・パーク（St. James's Park）に向かう。宮殿からCharing Cross駅に向けて，パーク沿いに4車線の立派な道が通っている。この宮殿から駅に着く中途にある立派な門アドミラルティ・アーチ(Admiralty

写真7：ウィンブルドン・コモン内の不法投棄現場（撮影：泉留維）

Arch）までの道を The Mall という。道路の両側には，ユニオンジャックが林立し，立派な木立が並木となっている。実は事前の文献調査では，ボストン・コモンにも立派な並木道あり，それを The Mall（ザ・マル）と名付けており，その名はセント・ジェームズ・パーク沿いのものから名を借りたと理解していた（Fisher, 2000）。しかしながら，現地ロンドンの The Mall の説明文を読むと，1910 年に創設され，その名は有名なフランスの“Paille-Mailie”，ゴルフとクロケットの間のようスポーツ，からとったとあった。このスポーツが 17 世紀頃，セント・ジェームズ・パークで“Pall Mall”という名で良く行われたそうだ。ボストン・コモンの The Mall は，1735 年には完成しており，上記の記述を信じれば，事前の文献調査はまったく間違っていたことになる。この当たりの詳細を知るためには，ボストンに行き，調べるしかないであろう。

泉はこのあと，午後からはウィンブルドン・コモン（Wimbledon Common）に向かう。同コモンは，チューブのディストリクト（District）線の終点であるウィンブルドン駅から徒歩で 30 分強の閑静な住宅地を抜けたところに

ある。この地は，テニスの四大大会でももっとも権威のあるウインブルドン・テニス大会が開かれるところで有名だ。

ウィンブルドン・コモンは，林地とヒースからなり，それにいくつかの池もあり，面積約445ヘクタールという広さである。このウィンブルドン・コモンは，正確に記すとPutney Heathと地続きになっており，現地の立て看板には“Wimbledon and Putney Commons”と合わせて紹介されていた。部分的には深い森林の趣を呈しており，倒木も時々見かける。深い森の中にはあちこちに踏み分け道があるほか，乗馬専用の道もある。森の中を歩いていると，ジョギングをする人と頻繁にすれ違い，犬を連れて散歩する人もよく見かけた。ただ，慣れない人にとっては，ほとんど案内板や標識がないため，すぐに道に迷ってしまい，どこにいるかはわからなくなってしまう。それもコモン散策の醍醐味といえばその通りであろう。

歴史的に見るとウィンブルドン・コモンの地は，長らく荘園領主が所有していた。ただ，土地の一部の庭園をのぞき，周辺住民は慣習的にそこを入会利用していた。しかしながら，第5代スペンサー卿（John Poyntz Spencer, 1835-1910, the 5th Earl Spencer）は，1864年，突然，村役場に住民を集め，コモンの3分の1を売却し，その資金で残りの大部分を公園用地として囲い込むという発表した（Website：Wimbledon & Putney Commons）。これを発端にして，国会議員や周辺住民を巻き込んでの「ウィンブルドン・コモン」紛争が起きる。ここではその結果だけを書いておくと，スペンサー卿は最終的には開発を断念し，「1871年ウィンブルドン・プトニィ入会地法」（The Wimbledon and Putney Commons Act 1871）が成立した（三俣・室田，2005）。スペンサー卿の土地は，有償で保全理事会（body of Conservators）に引き渡され，それ以降は私的にも公的にも囲い込まず，建物を建てず，もとの自然の状態を保つ状態でオープンスペースとして万人に開放されることになった。ちなみに，スペンサー卿への補償金支払い（1968年終了）とコモンの維持・管理費に関しては，地域住民がその

ための特別の税を支払っている。

このコモンでは，所々ではあるが，不法投棄と思われる廃棄物の一群を目にした。オープンスペースでかつ人目につかないところでは必然的に起こってしまうのであろうか。このようなオープンスペースでの不法投棄は，他の場所でも散見され，美しい自然環境だからみなのものとして囲い込むのはやめよう，という発想と，みなのものであり誰のものでもないのでそこを不法投棄の場所にしてもかまわない，という発想が並存している（三俣・室田，2005）。すなわち，関係者同志のモニタリングが働かないためであるが，特に近年の英国の場合そもそも不法投棄が起こるのは大量消費・大量廃棄という社会経済的背景が強く起因しているためであろう。

8月10日で3人での各地のコモンの訪問は終了した。翌11日は，三俣と泉は次の調査値であるマン島に向かうため，早朝にホテルを発つ。一方，室田は，当時日本の本務先から在外研究の機会を与えられ，スウェーデンのストックホルムに住んでいた。そして，この日のうちにストックホルムに帰る必要があった。しかし，そのためのフライトがヒースロー空港を出るのは夕方であるため，空港に行く前にもう一つだけロンドンのコモンを見学することにした。そこで，チューブだけでなく，ナショナル・レイルの利用にも慣れておきたいと思い，ナショナル・レイルの駅から歩いてすぐ行けそうなファージング・ダウンズ（Farthing Downs）を訪ねることに決めた。これは，大ロンドン市の南端にあるクロイドン区にあるかつての放牧入会地で，最寄り駅はクールドン・サウス（Coulsdon South）である。

駅から10分程でファージング・ダウンズの北の端に着いた。そこには緩い傾斜の草地が見渡す限りといっていいくらい遠くまで南にのびていた。乗馬用の道がたくさんつけられている。実際，乗馬を楽しんでいる人を数人見かけた。よく晴れた日で，真っ青な夏空の下にアザミの花が至るところに咲き乱れているのが印象的だった。

このコモンの歴史をごく手短にいうと，先述しているが1878年に制定された「ロンドン・オープンスペース法」に端を発している。ファージング・ダウンズは，この法律に基づいて開発を免れ，1883年に自治法人ロンドンのものとなり，今日に至っている。

イングランド南東部は，石灰岩が風化した白いチョークの土壌が広がるところとして知られるが，ファージング・ダウンズは，そうしたチョーク土壌に発達した草地として独特の植生を有しているといい，放牧をやめると潅木類の茂みに変わってしまうのだそうである。このため自治法人ロンドンは，伝統的な独自の景観を保全するため，放牧を続けながら，そこをオープンスペースにしている(Website：Farthing Downs)。全体を歩いてみる時間の余裕がなかったが，ここにはローマ時代の遺跡やサクソン人の農耕地跡などがあり，考古学的にも重要なところだという。いつかゆっくり歩いてみたいと考えつつ市内にもどり，チューブでヒースロー空港に向かった次第である。

この日，三俣と泉は，マン島の入会放牧地および独自の地域貨幣システム，そしてアイルランド西部のアキル島の泥炭採掘地などの調査に向かったが，それについては機会を改めて記したい。

4，おわりに

スカイ島では，羊の放牧数がきわめて多い。それは統計的な数もさることながら，島内を車で巡っていると羊を見ない瞬間はないといったほど体感できるものである。現在においても羊毛産業がそれなりに成立しているのであろう。ハイランド地方における羊毛産業の積極的導入を図ろうとした時代を象徴するハイランド清掃では，一部の大土地所有者のために，借地農であるクロフターをはじめとする圧倒的多数の社会的弱者が犠牲になった。その後，クロフターたちの懸命の抵抗やローランド地方の人たちや

報道機関などによる支援によって，クロフターの権利の確立に向かい，1880年以降，クロフターたちの生命線である入会放牧権が法制度的に認知された。日英比較の視点からこの点に関する歴史・経済的意義の検討も今後の課題であろうと考える。

スカイ島のそうした頻繁に見られる羊の様子の一方で，穀物や野菜を栽培する畑をほとんど見かけず，山には樹木が非常に少なく，見とれるぐらいの立派な木は存在していなかった。とはいえ，クロフターの権利として認められた地主との契約による植林とおもわれるところも何ヶ所かあり，そういったところは比較的年齢の若い林層を形成している場合が多く見られた。また漁業は，大西洋まで出て行く形より，湾内の養殖が中心になっていると思われる。B&B 形式の民宿が島の至るところにあり，農業や工業が発達していない中で放牧と並び観光業の重要性が伺われた。

ロンドンとその近郊については，入会地の意味が19世紀半ばまでとそれ以降とでは根本的に変わっていると考えられる。現在のように科学技術が発展する以前は，人間の食はかなり限られた地域空間で供給されており，それに伴い入会地も地元民の食料生産に貢献する機能，すなわち自給的な意味合いで存在する面が非常に強かった。もちろんニューフォレストのように王侯貴族の狩猟場といった入会地もあり，そこでは確かにハンティングというレクレーション的意味合いをもつ利用がなされたわけである。その意味では例外ともいえるが，近隣住民によるニューフォレストでの入会は基本的に自給利用であったわけであり，全体的に見て圧倒的に自給的コモンズであったといえる。しかしながら，その後の経済発展や都市化が進捗する中で，人口密集地周辺の入会地の多くは，レクレーションの対象としての役割が強くなるにつれて，次第にオープンスペース化していくようになる。このような移行は，アメリカのボストン市にあるボストン・コモンでも観察できるが，一方で日本の場合，相対的に見て入会地のオープン化していく歴史的変遷は辿ってはいない。この相違は非常に興味深いもの

であり，両国の経済社会・法制度・文化的諸側面を踏まえた上で，その差異を検討する必要があり，共著者らの今後の共通課題の一つにしたい。

また，オープンスペースという存在を仮に都市緑地の一つの在り方と考えると，それとクローズドな私設庭園とを比較してみることにも意味があるかもしれない。広大なニューフォレストは，ロンドンとその近郊のコモンとは別なものに思える。そこは，キャンプサイトやB&Bが数多く存在するという意味では単なる日帰りのレクレーションの場という域を超えた一大観光地であると共に，生物多様性を維持する自然空間ともなっている。

短期間ではあるが，スコットランドのスカイ島に始まり，イングランドのロンドン中心部ならびに郊外の入会地をこの目で見ることで，文献から読み解ける過去の入会地のあり方と，そこから様々な歴史を乗り越えて行き着いた現状を皮膚感覚で比べてみることができた。この体験と，現地で収集した文献資料を合わせ，歴史的変遷をふまえた上でさらに英国のコモンズの現在的意味について詳細に考察していく予定である。

謝　辞

本研究ノートの地図作成にあたっては，神戸商科大学の学部生橋本和也氏にお世話になった。ここに記して感謝したい。

注

1)　ポリッジは，スコットランド起源であり，それについてはRobertson（2003）を参照のこと。

2)　イングランドとスコットランドの境にある丘陵地帯（816 m）Cheviot Hills原産の良質な羊毛のこと。

3)　tacksmanとはスコットランド特有の概念で，エステートの広い土地を買い受け，それを別の人に又貸しする仲介業者middlemanのことである。

4)　2.1ですでに紹介しているアーマデイルは，スカイ島の南東端に近いところにある港町で，現在では本土のマレイグとの間にフェリーが就航している。

5)　2003／2004タームで，自治法人ロンドンが管理するオープンスペースに関する

総支出と総収入は，それぞれ約1910万ポンドと約390万ポンドであった。支出の過半は人件費である（Open Spaces Department, 2004, pp. 30-32）。

6）ロンドンエリアに点在する非常に小さな公園群もオープンスペースとして勘定すれば，9ヶ所になる。

7）オープンスペース部門に所属している常勤職員の数。

8）「サザンプトン州ニューフォレストに関する法の運用その他の修正法」。詳細については，平松（1995）の第3章を参照のこと。

参考文献一覧

邦文献

キレーン，リチャード（2002）『図説　スコットランドの歴史』（岩井淳・井藤早織訳），彩流社。（Killeen, Richard, 1994, A Short History of Scotland, CLB International.）

下条美智彦（1995）『イギリスの行政』早稲田大学出版部。

平松紘（1999）『イギリス緑の庶民物語』明石書店。

平松紘（2003）「イギリスにおける'歩く権利法'と自然保護―自然共用制に向けて―」環境法政策学会編『環境政策における参加と情報的手法』商事法務，166-174頁。

三俣学・泉留維（2005）「ボストン・コモンの歴史的変遷と制度分析：ニューイングランドに移植されたコモンズの意義」『商大論集』（兵庫県立大学），掲載予定。

三俣学・室田武（2005）「環境資源の入会利用・管理に関する日英比較：共同的な環境保全に関する民際研究に向けて」『国立歴史民俗博物館研究報告』，掲載予定。

室田武・三俣学（2004）『入会林野とコモンズ』日本評論社。

欧文献

Britannica : Micropaedia, Volume 6 (1994) "Chicago", *Encyclopaedia Britannica.*

Fisher, David Hackett (2000) "Boston Common," in William E. Leuchtenburg (ed.), *American Places : Encounters with History,* New York : Oxford University Press.

MacDonald, J. (1998) *a Short History of Crofting in Skye,* Kilmuir, Scotland : Skye Museum of Island Life.

MacDonald, J. (2000) *Discovering Skye : a Handbook of the Island's History and Legend,* Kilmuir, Scotland : J. MacDonald.

Open Spaces Department, Corporation of London (2003) *West Wickham & Coulsdon Commons Summary : Management Plan* 2002 - 2005, London : Corporation of London.

Open Spaces Department, Corporation of London (2004) *Open Spaces : Annual Report* 2003/2004, London : Corporation of London.

Ponting, G. (2002) *New Forest : Second Edition,* Ashbourne, Derbyshire : Landmark Visitors Guide.

Reid, D. (2003) "Crofters' Common Grazings", *Commonweal of Scotland-Working Paper* 2 (1), Caledonia Centre for Social Development.

Robertson, U. A. (2003) "Porridge," in S. H. Katz, ed., *Encyclopedia of Food and Culture : Volume* 3, New York : Charles Scribner's Sons, pp. 105-106.

Richards, Eric (2000) *The Highland Clearances : People, Landlords and Rural Turmoil,* Edinburgh : Birlinn.

Weinreb, B. and C. Hibbert, eds. (1983 a) "Highgate", *The London Encyclopedia,* London : Macmillan, pp. 379-382.

Weinreb, B. and C. Hibbert, eds. (1983 b) "Kenwood House", *The London Encyclopedia,* London : Macmillan, pp. 428-429.

Williams, Paul (2003) *Walks : Isle of Skye,* Port-an-Eilean, Scotland : Hallewell Publications.

Web サイト (2005 年 1 月 8 日時点の URL)

BBC スカイ・ブリッジ:http : //news.bbc.co.uk/1/hi/scotland/3692589.stm

Ben Nevis:http://www.jmt.org/cons/nevis/

Corporation of London:http : //www.cityoflondon.gov.uk/Corporation/about_us/_whatis.htm

Clapham Common:http : //www.wandsworth.gov.uk/NR/Wandsworth/localpdf/planning/plothconclapcom.pdf

Clapham Common bandstand:http : //www.glias.org.uk/news/205 news.html # J

Ealing Common:http : //www.ealing.go.uk/services/planning/planning+services/ealing+common.pdf

Eling Tide Mill:http : //www.eling.aaugonline.net/

Farthing Downs:http : //www.cityoflondon.gov.uk/Corporation/living_environment/open_spaces/west_wickham.htm

Hampstead Heath:http : //www.cityoflondon.gov.uk/Corporation/living_environment/open_spaces/hampstead_heath.htm

Highgate Wood:http : //www.cityoflondon.gov.uk/Corporation/living_environment/open_spaces/highgate_wood.htm

Kenwood House:http : //www.touruk.co.uk/london_houses/kenwood_house 1.htm

Lord Mayor:http : //www.cityoflondon.gov.uk/Corporation/business_city/lord-

mayor/lordmayor.htm
Massacre of Glencoe:http：//www.electricscotland.com/history/glencoe/glen 3.html
Massacre of Glencoe 1692:http：//www.bbc.co.uk/history/timelines/britain/stu_glencoe.shtml
North Carolina:http：//www.elohi.com/photo/scotland/redsprings.html
ランブラーズ協会:http：//www.ramblers.org.uk/
Short History of Crofting in Skye:http：//pages.eidosnet.co.uk/~skye/crofting.html
ScotRail Time Table 2004:http：//www.scotrail.co.uk/route 06 a.pdf
スコットランド歩く権利協会:http：//www.scotways.com/
Streatham:http：//www.lambeth.gov.uk/about-lambeth/town-centres-streatham.shtml
Tooting Common:http：//www.wandsworth.gov.uk/Home/EnvironmentandTransport/Parks/Parkscommons/TootingCommon.htm
Wandsworth Common:http：//www.wandsworth.gov.uk/Home/EnvironmentandTransport/Parks/Parkscommons/WandsworthCommon.htm
Wimbledon & Putney Commons:http：//www.wpcc.org.uk/HISTORICALINFORMATIONhistory.htm